足らずして、適は餘あり。因つて、淵明の飲酒二十首に和す。庶はくは、以てその名づくべからざるものを髣髴せしめむ、舍弟子由・晁无咎學士に示す。

我不如陶生。世事纏綿之。　われ、陶生に如かず、世事、これを纏綿す。
云何得一適。亦有如生時。　ここに何ぞ一適を得む、亦た生時の如きあり。
寸田無荆棘。佳處正在茲。　寸田、荆棘なく、佳處、正に茲に在り。
縱心與事往。所遇無復疑。　心を縱にして、事と往く、遇ふところ、復た疑ふなし。
偶得酒中趣。空杯亦常持。　偶ま酒中の趣を得、空杯、亦た常に持す。

【題義】　敍の意味は――予は、酒を飲むこと、極めて少量であつて、ただ盞を手に把ることを以て樂となし、動もすれば、居睡をして居る。そこで、人は之を見て、醉つて居るといつて居るが、予は心中了然として、醉つて居るか、自分でも能く之に名づくることが出來ない。揚州に在る時、酒を飲んで、亭午を過ぐれば罷め、相手の客が去れば、衣を脱いで、しどけなき樣をして居る。終日、格別喜ばしいこともないが、快適は餘あるを覺えた。今、陶淵明の飲酒二十首に和して、この詩を作つたので、希はくは、醉醒、いづれとも名づけ難きものを彷彿として、ここに顯はすことが出來たであらう。仍つて、これを舍弟子由竝に晁无咎學士に見せることにした。

【詩意】　予は、淵明先生に及ばないので、世事が、いつまでも付き纏うて居る。そこで、如何にして一快適を得べきか、もし之を得たならば、さながら世に生まれ出る其時の樣であらう。今や、わが方寸の內、荆棘の之を塞ぐなく、佳處、正に此に在りといふべく、心の儘にして、事の往くに隨ひ、そして、法度を越ゆることなく、遇ふところは、いづれも、必然な事である。偶然にも酒中の趣を得たから、空杯でもかまはず、常に之を手に持つて、それで打澄まして居る。

【餘論】　紀昀の評に「この首、陶意に純、首句、義に於て、應に我生不レ如レ陶に作るべし。然れども、四句、乃ち生の字あれば、固より稱して陶となす、未だ生造を免れず」とある。

二豪詆醉客。氣湧胸中山。　二豪、醉客を詆る、氣は湧く胸中の山。
滃然似冰釋。亦復在一言。　滃然として、冰の釋くるに似たり、亦た復た一言に在り。
嗇氣實其腹。云當享長年。　嗇氣、その腹を實たす、云ふ、當に長年を享くべしと。
少飲得徑醉。此祕君勿傳。　少飲、徑に醉ふを得、この祕、君、傳ふる勿れ。

【字解】　〔一〕二豪　劉伶の酒德頌に「貴介公子、搢紳處士あり、吾が風聲を聞いて、その所以を議す。先生、方に襟を抗げ、膂を承け、杯を銜み、醪に漱ぎ、思ふなく、慮るなく、その樂融融、兀然として醉ひ、恍爾として醒む、二豪、側に侍して、螬蠆の蝨蚊との如し」とある。〔二〕嗇氣　老子に「その心を虛しくし、その腹を實たす」とあるに本づく。

【詩意】　貴介公子と搢紳先生と、この二豪が醉客を詆り、その氣概の淒まじきは、胸中に山を湧き出

でしむるばかり。しかし、二豪をして、渙然その疑を氷釋せしめるは、唯だの一言で十分なので、何でも、人は心を虛しうして、腹を實たしさへすれば、長年の壽を享けることが出來る。就中、予の如く、少し飲んで直に醉ひ、それで、浮世の事を忘れて仕舞ふのは、まことに結構なことで、この祕傳は、なかなか、人に傳へることは出來ない。

【餘論】紀昀の評に「これ陶に似ず、亦た本色を見ず、殊に取るべきなし」といつて居る。

道喪士失己。出語輒不情。道、喪うて、士、己を失ふ、語を出す、輒ち情ならず。
江左風流人。醉中亦求名。江左風流の人、醉中亦た名を求む。
淵明獨清眞。談笑得此生。淵明、ひとり清眞、談笑、この生を得たり。
身如受風竹。掩冉衆葉驚。身は風を受くるの竹の如く、掩冉として衆葉驚く。
俯仰各有態。得酒詩自成。俯仰、各〻態あり、酒を得て、詩、自ら成る。

【字解】〔一〕江左風流人　江左は東晉以後、建業に都せしが故に云ふ。この時分、なほ清談の餘弊を存し、士大夫は、放逸を事として居た。南史王儉傳に「江左の風流宰相、唯だ謝安あり」とある。〔二〕掩冉　さわさわと動く貌。

【詩意】大道が地に落ちて、行はれぬ樣になれば、士人も亦た己を失つて操守なく、話をしても、その言ふところは、人情に背いて居る。されば、江左風流の人人も、全然、浮世を思ひ切ることが出來ず、醉中に於ても、亦た虛名を求めて居た。しかし、陶淵明は、ひとり清眞であつて、飲酒談笑の間に於て、この生を全うして居た。その身は、風を受くる竹の如く、ひとり挺然として居て、多くの草木の葉が掩冉として靡くのを見下して居る。そこで、俯仰の間、萬物各〻態を爲し、酒を得さへすれば、詩は、自然に出來るのである。

【餘論】紀昀は「これは、參するに本色を以てす、未だ嘗て佳ならずんばあらず」と云つて居る。

蠢蠕食葉蟲。仰空慕高飛。蠢蠕、葉を食ふの蟲、空を仰いで高飛を慕ふ。
一朝傅兩翅。乃得黏網悲。一朝、兩翅を傅くれば、乃ち網に黏するの悲を得。
啁啾同巢雀。沮澤疑可依。啁啾、同巢の雀、沮澤、依るべきを疑ふ。
赴水生兩殼。遭閉何時歸。水に赴いて兩殼を生じ、閉に遭うて何時か歸らむ。
二蟲竟誰是。一笑百念衰。二蟲、竟に誰か是なる、一笑、百念衰ふ。
幸此未化間。有酒君莫違。幸に此に未だ化せざるの間、酒あり、君、違ふなかれ。

【字解】〔一〕蠢蠕　蠢然として蠕動する蟲、即ち蜉蝣の幼蟲、ここでは、主として、柑橘類に付く蟲を指す。陶彭蒙の蠹化に「橘の蠹、大さ、小指の如く、葉を齧して仰ぎ蓄み、飢蠹の速なるが如し。蛻して蝴蝶となつて、空に乘え、翅輕く、翩然として去る。須臾に、蛛網を犯して、之に膠し、絲を引けば還つて纏はれ、宇として梏梏の若し」とある。〔二〕赴水生兩殼　禮記に「季秋の月、爵、大水に入つて蛤となる」とある、爵は即ち雀。

【詩意】蠢然蠕動、葉を食つて居る蚍蜉は、天を仰いで高飛したいと思つて居るが、一朝、兩の翅を傳けて飛べる樣に成ると、蜘蛛の網に黏ばり付いて、捕はれるといふ悲かがある。啁啾として終日囀つて居た同巢の雀は、沮洳沼澤が住み善いと思つて居たが、一旦、水に赴き、兩殼を生じて蛤となると、その殼が閉ぢたッ切りで、何時歸るといふ目的もない。この二蟲は、果して其當を得たものか、誰しも、哄然一笑して、樣樣の慾望は、すッかり消えて無くなるであらう。人も未だ他物に化し去らざる此間に於て、安心立命を求めて十分に樂むが善いので、酒あらば、君、これに違ふなく、勝手に召し上るが善からう。

【餘論】紀昀の評に「託興深妙にして、氣息、亦た復た古に近し」といひ「結二句、形神、ともに似たり」といつて居る。

小舟眞一葉。下有暗浪喧。　小舟、眞に一葉、下に暗浪の喧しきあり。
夜棹醉中發。不知枕几偏。　夜棹、醉中に發し、知らず枕几の偏するを。
天明問前路。已度千重山。　天明、前路を問へば、すでに千重の山を度る。
嗟我亦何爲。此道常往還。　嗟す、我、亦た何をか爲さむ。この道、常に往還。
未來寧早計。既往復何言。　未來は寧ろ早計ならむや、既往は、復た何をか言はむ。

【詩意】一葉に比すべき小舟があつて、舟底には暗浪の騷がしきが聞こえる。醉中、夜、棹を移して舟を漕ぎ出し、枕几の片寄つて居るをも知らなかつた。やがて、夜あけに成つて、前路を問ふと、最早、千重の山を後にして、大分遣つて來たとのことである。この時に當つて、我は如何にすべきか、毎毎往還する道ではあるが、どうも安心の出來ぬ氣がする。但し、未來の事を論ずるのは、決して早計ではなからうか。既往の事は、いくら何といつても仕方がない。

【餘論】紀昀の評に「時に委せ、運に任かすの意」とある。

百年六十化。念念竟非是。　百年、六十にして化す、念念、竟に是に非ず。
是身如虛空。誰受譽與毀。　この身、虛空の如く、誰か譽と毀とを受けむや。
得酒未舉杯。喪我固忘爾。　酒を得て未だ杯を擧げず、我を喪へば、もとより爾を忘る。
倒牀自甘寢。不擇菅與綺。　牀を倒にして、自ら寢ぬるに甘んず、擇ばず、菅と綺と。

【字解】〔一〕倒牀　寢臺を倒さにする。〔二〕菅與綺　菅はアンペラ、席の如きもの。綺は、奇麗な織物の夜具。

【詩意】百年と決まつて居る命が、六十で死ぬとして、一たび回顧すれば、從前の事は、遂に是に非す、從つて、後悔すべきことのみである。この身は、虛空の如く、本來一物なく、毀譽を受くべき筈の物ではない。ここに、酒を得て、未だ杯を擧げず、飲まぬ先から醉つた樣な氣がして、すでに我

を喪へる上は、もとより、汝をも忘れて居る。そこで、寢臺を倒にして、寢ぬるを甘んじ、その上にかける夜具などは、如何な物でも、かまはない。

【餘論】紀昀は「次句、佳ならず」といつて居る。

頃者大雪年。海派翻玉英。
有士常痛飲。飢寒見眞情。
牀頭有敗榼。孤坐時一傾。
未能平體粟。且復澆腸鳴。
脫衣裹凍酒。每醉念此生。

【字解】〔一〕海派　海の分れ、海灣に同じ、一に海波に作る。〔二〕翻玉英　雪が降る、これは嘉祐庚子の歳の事で、大雪興ゝ客飲。劉氏一の詩がある。

【詩意】この頃、大雪の降ることがあつて、海灣の上に、六出紛紛として翻つた。その時、予は、常に痛飲し、飢寒に因つて、眞情を見るを得た。臥牀の邊には、古りたる酒壺があつて、孤坐しつつ、時たま、これを傾けた。それでも、肌に粟だつことを醫することが出來ず、腸に澆ぎかけると、聲を發して鳴るが如くであつた。そこで、衣を脫ぎ、凍れる酒を裹んで暖め、一醉する每に、つくづくと我が生を念ふ。

我坐華堂上。不改麋鹿姿。
時來蜀岡頭。喜見霜松枝。
心知百尺底。已結千歲奇。
煌煌凌霄花。纏繞復何爲。
舉觴酹其根。無事莫相羈。

【字解】〔一〕千歲奇　史記龜策傳に「伏靈は千歲の松根なり」とある。伏靈は卽ち茯苓。〔二〕凌霄花　のうぜんかつら、白樂天の詩に有ゝ木名ニ凌霄一擢ゝ秀非ニ孤標一偶依ニ一株樹一遂抽ニ百尺條一託ゝ根附ニ樹身一開ゝ花寄ニ樹梢一とあり、孔穎達の詩疏に「一名は凌時」とあり、本草に「紫蔵は凌霄花なり、蔓生、大木に依り、久しうして延びて巔に至る、その花黃赤」とある。〔三〕酹　酒を注ぎかける。

【詩意】予は、華堂の上に坐して居ても、麋鹿の姿を改めず、時時、蜀岡の邊に來て、霜を帶びたる松の老木を見て居る。おもふに、百尺の巨幹の下には、屹度、千歲を經て出來るといふ伏苓がくッ付いて居るに相違ない。凌霄花は、煌煌として見事であるが、その卷き付くのが厄介である。そこで、杯を擧げて、松の根に酒を注ぎかけ、予も遠からず、官を罷める積りであるから、誰でも、事端を起さず、相猜まぬ樣にして貰ひたいといつた。

【餘論】これは、松樹を以て自ら比し、その胸中に蘊蓄するところあるを云つたのである。凌霄花の

二句に就いて、紀昀は「吏事の煩に比するなり」といつたが、これは、小人輩の相猜むことを云つたので、現に、王文誥は、結二句に就いて「公、杭に倅たるの時、すでに、市人拍レ手笑、狀如二失レ林麓一の句あり、この章の詩旨、久しからずして山に還り、意を決して復た更に入らず、羣小相猜むを須ふるなきなり」といつて居る。なほ、紀昀は、全首を評して「氣骨渾成、意思は森森たる芒角」といつたが、これは大に當つて居る。

芙蓉在二秋水一。時節自闔開。
清風亦何意。入二我芝蘭懷一。
一隨二采折一去。永與二江湖一乖。
斷絲不二復續一。斗水何足レ栖。
不レ如玉井蓮。結レ根天池泥。
感レ此每自慰。吾事幸不レ諧。
醉中有二歸路一。了了初不レ迷。
乘レ流且復逝。抵レ曲吾當レ回。

【字解】〔一〕闔開　開落に同じ。〔二〕芝蘭懷　靈芝や蘭を摘んで入れて置く懷。〔三〕斗水　瓶中の水。〔四〕玉井蓮　山海經に「太華の山、削成して、四方高さ五千仞、廣さ十里」とあり、華山記に「山頂に池あり、千葉の蓮花を生ず」とある。

【詩意】蓮は、秋水の中に生ひ出で、時節に遇うて、自然に開花する。清風、亦た意あるが如く、その香を送つて、芝蘭を摘んで入れた我が懷中に吹き込んだ。一たび蓮の花を折つて仕舞へば、長しへに江湖と緣が切れて、斷ぎれし絲は再び續かむ由もなく、瓶中の斗水では、とても活きて居られぬ。それよりも、華山の絕頂なる玉井に生ふる蓮は、根を天池の泥に託して、誰にも折られる樣はない。予は、此事に感じて、每每自ら慰めて居るので、もし幸にして、浮世で思ふ樣に成らぬ時は、醉中に歸路があるから、そこへ逃れ去れば善いので、了了として、決して迷ふことはない。そこで、流に乘じて立ち去るべく、曲り目に來て、路が分からなくなれば、引き回すだけのことである。

【餘論】紀昀の評に「刻意、古しへに效ひ、しかも、結處、仍ほ本色を露はす」とある。

籃輿兀醉守。路轉古城隅。　籃輿兀醉守、路は轉ず古城隅。
酒力如過雨。清風消半途。　酒力、過雨の如く、清風、半途に消ゆ。
前山正可數。後騎且勿驅。　前山、正に數ふべく、後騎、且つ驅る勿れ。
我緣在東南。往寄白髮餘。　わが緣、東南に在り、往いて寄す白髮の餘。
遙知萬松嶺。下有三畝居。　遙に知る、萬松嶺、下に三畝の居あるを。

【字解】〔一〕萬松嶺　西湖附近に在つて、その地の續梅は、前に數ば詩中に見えて居た。

【詩意】兀兀として醉ひたる太守は、籃輿に乘じ、やがて、古城の隅に來ると、路が曲る。酒の力は、驟雨の如く、決して長くは持たないもので、清風に吹かれ、半途で全く消えて仕舞つた。前山は、正に數ふべくして、佳景、世の常ならず、後から來る護騎は、しばらくの間、せき立てぬ樣にせよ。われは、東南に緣あるもので、白髮の餘生を其地に寄せやうと思つて居る位。中にも、萬松嶺の下には、ささやかながら三畝の隱宅があるから、いつかは、そこへ往かうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「これ頗る枯淺」といひ、王文誥は「これ小舟眞一葉の一首と同意」といつて居る。

民勞吏無德。歲美天有道。民勞して吏に德なく、歲美にして天に道あり。
暑雨避麥秋。溫風送蠶老。暑雨、麥秋を避け、溫風、蠶の老を送る。
三咽初有聞。一漑未濡槁。三咽、初めて聞くあり、一漑、未だ槁を濡さず。
詔書寬積欠。父老顏色好。詔書、積欠を寬にし、父老、顏色好し。
再拜賀吾君。獲此不貪寶。再拜、吾が君を賀す、この貪らざるの寶を獲たり。
頹然笑阮籍。醉几書謝表。頹然として阮籍を笑ひ、醉几、謝表を書す。

【字解】〔一〕送蠶老　蠶が生熟して繭を作る。卽ちあがる。〔二〕三咽　意義未詳、或は食が喉を下らないといふ樣なことかも知れない。〔三〕寬積欠　租稅滯納の督促を寬大にする。元祐七年五月・六月と打續いて、東坡は、その事を願ひ出で、やがて、勅許に成つた。〔四〕不貪寶　左傳に「宋人、或は玉を得、これを子罕に獻ず、受けずして曰く、われは貪らざるを以て寶となす」とある。〔五〕阮籍　前に笑ふ任遙翠の詩中に註して置いた。

【詩意】民は疲れて、吏に德なきを知るべく、年の豐なるは、天に道あるが爲めである。夏の雨は、麥秋を避けて降るべく、暖い風は、早く蠶のあがる樣にする爲である。われ、揚州に來りし後、兎角、災害が打續いて、その實況は、聞くに堪へず、頃ろ雨が降つたといふが、ほんの少しばかりで、まだ枯槁せるものを濡すに及ばぬ。天子は、詔を下して、租稅滯納の督促を寬大にせよと仰せられ、父老は、初めて、顏色も直り、再拜して、予に賀意を表し、貴下は貪らざるを寶とする御方で、これを上に戴くことは、まことに有り難い仕合であるといつた。予は、やがて頹然として酒に醉ひ、故らに曠達を爲して禮法を蔑視した阮籍の狂愚を笑ひながら、取り敢へず、天子への謝表を起草した。

我夢入小學。自謂總角時。われ、夢に小學に入る、自ら謂ふ、總角の時。
不記有白髮。猶誦論語辭。白髮あるを記せず、猶ほ誦す論語の辭。
人間本兒戲。顚倒略似茲。人間、本と兒戲、顚倒、略ぼ茲に似たり。
惟有醉時眞。空洞了無疑。惟だ醉時の眞あり、空洞、了に疑なし。
墜車終無傷。莊叟不吾欺。車より墜つるも、終に傷つくなし、莊叟、吾を欺かず。
呼兒具紙筆。醉語輒錄之。兒を呼んで紙筆を具し、醉語、輒ち之を錄す。

【字解】〔一〕總角　結髮、未だ冠せざる間を云ふ。〔二〕空洞　前に法惠寺の詩中に注して置いた。〔三〕壓車殺無傷　莊子に「夫れ、醉ふ者の車より墜つる、疾しと雖も死せず、骨節人と同じ、しかも、犯害人と異なり、その神、全きなり。彼、全を酒に得、しかも猶ほ是の若し、況んや、全を天に得るをや」とある。

【詩意】予は、小學に入つた夢を見たが、自分では、あげまきの少年と思つて居て、頭上に白髮あるをも記せず、論語を聲高に讀み上げた。考へて見れば、人間の事は、本と兒戲で、終生下らぬことに骨を折つて居るのは、丁度、夢中小學に入つたと同じである。唯だ、人間は、醉つた時のみが實正であつて、空明虛靈、了然として疑ふべきことはない。車から落ちても、醉つて居れば、怪我をしないといふが、如何にも、その通りで、莊子は、決して吾を欺かない。そこで、兒を呼んで、紙筆を具へしめ、醉中の言語を其儘書きつけて見た。

【餘論】紀昀は「これ全く是れ本色」といつて居る。

醉中雖可樂。猶是生滅境。醉中、樂むべしと雖も、猶ほ是れ生滅の境。
云何得此身。不醉亦不醒。ここに何にか此身を得、醉はず、亦た醒めざらむ。
癡如景升牛。莫保尻與領。癡は景升の牛の如きも、尻と領とを保つなし。
黠如東郭魏。東縛作毛穎。黠は東郭の魏の如きも、東縛せられて毛穎となる。
乃知嵇叔夜。非坐虎文炳。乃ち知る、嵇叔夜、虎文の炳に坐するに非ず。

【字解】〔一〕景升牛　晉書桓溫傳に「劉景升、千斤の大牛あり、芻豆を啖ふこと常牛に十倍し、重きを負うて遠きに致すは、かつて一嘉粋に若かず。魏武、荆州に入り、以て軍士を享す」とある。〔二〕尻與領　領は首。〔三〕東郭魏　魏は兎、韓愈の毛穎傳に「東郭に居るものか魏といふ、蒙將軍、その毫を拔き、穎を截せて歸り、その族を案めて東縛を加ふ」とある。〔四〕毛穎　筆を云ふ。〔五〕嵇叔夜　晉書嵇康傳に「字は叔夜、詞氣は美にして風儀あり、しかも、形體を土木にして、自ら藻飾せず」とある。

【詩意】醉中は樂むべきであるが、しかし、依然として生滅の境界である。どうすれば、この身をして、醉はず、又醒めず、卽ち生滅以上に超出せしめることが出來やうか。癡愚なること、劉景升の牛の如きも、しまひには、殺されて、尻と首とを全うすることが出來ず。狡黠なること、東郭の兎の如きも、はては、束ね縛られて、筆と成つて仕舞つた。癡愚狡黠、ともに、その身を保つ所以ではない。されば、嵇叔夜の如きは、形骸を土木にして自ら藻飾せず、炳然として文ある虎の皮の上にも坐らなかつたといふことである。

【餘論】紀昀は「參するに禪悅を以てし、全然本色、興の至るところ、忽ち合し、忽ち離れ、似るに意あるに非ず、亦た似ざるに意あるに非ず」といつて居る。

我家小馮君。天性頗醇至。わが家の小馮君、天性、頗る醇至。
清坐不飲酒。而能容我醉。清坐、酒を飲まず、しかも能く我が醉を容る。
歸休要相依。謝病當以次。歸休、相依るを要す、病を謝す、當に次を以てすべし。

豈知山林士。[一]骯髒乃爾貴。　豈に知らむや、山林の士、骯髒、乃ち爾かく貴し。
乞身當念早。[二]過是恐少味。　身を乞ふ、當に早きを念ふべし、過ぐれば、是れ恐らく
　　は味少からむ。

【字解】[一] 小馮君　前に春歩西園の詩中に注して、漢書馮來世傳を引いて置いた。ここでは、弟子由を指す。[二] 骯髒　不遇不平の貌。[三] 過是恐少味　馬援の楊廣に與ふる書に「今に及びて計を成す、殊に尚ほ善きなり。過ぐれば、是れ味少からむと欲す」とあるを用ふ。

【詩意】わが弟の子由は、天性、頗る至醇、清坐して酒も飲まないが、それでも能く我が醉を容れて、格別、小言も言はない。早晩、官を休めて歸田し、相依つて、餘年を送らうと思つて居るが、病を謝して官を辭することは、次序を以てすべく、予が第一に、さう爲る筈である。元來、山林の士は、骯髒不平、世と相容れぬ處が貴いのである。身の暇を願ふことに就いては、成るべく早くする樣に心がけるのが肝腎で、時を過ぎて仕舞ふと、恐らくは、格別、面白くもなく、味少く成るであらう。

【餘論】紀昀は「陶意、本色より多し」といつて居る。

去鄉三十年。風雨荒舊宅。　鄉を去ること三十年、風雨、舊宅荒る。
惟存一束書。寄食無定跡。　惟だ一束の書を存し、寄食、定跡なし。
每用愧淵明。尙取禾三百。　每に用つて淵明に愧づ、尙ほ取る禾三百。

頎然六男子。粗可傳清白。[四]　頎然たる六男子、粗ぼ清白を傳ふべし。
於吾豈不多。何事復歎息。　吾に於て、豈に多からざらむや、何事か復た歎息する。

【字解】[一] 禾三百　前に次韻段躍の詩中にも注して置いたが、詩經に不稼不穡、胡取禾三百廛とあつて、ここでは俸祿を云ふ。[二] 頎然　丈の高き貌、詩經に猗嗟昌兮、頎而長兮とある。[三] 六男子　東坡の子、邁・迨・過、子由の子、遲・適・遠た併稱す。[四] 清白　後漢書楊震傳に「子孫、常に蔬食步行す。或は、爲に產業を開かしむ、震、肯んぜずして曰く、後世をして、稱して清白吏の子孫と爲さしむ、此を以て之に遺す、亦た厚からずや」とある。

【詩意】故鄉を出て、すでに三十年に成るから、舊宅は、風雨の爲に荒らされたであらう。ただ一束の書物を攜帶し、隨處に寄食して、一定の跡だになく、每每淵明に愧づるのは、碌な事もせずして、棄て扶持を頂戴して居ることである。二家の六男子は、身の長もすらりとして、いづれも、一廉の人物で、清廉潔白の名を傳へることが出來る。われに取つては、これで十分で、格別、歎息するにも及ばない。

【餘論】紀昀は「亦た陶意多きに居る」といつて居る。

嘵嘵六男子。絃誦各一經。　嘵嘵たる六男子、絃誦、各一經。
復生五丈夫。戢戢丁欲成。　復た五丈夫を生まば、戢戢として、丁、成らむと欲す。
歸田了門戶。與國充踐更。　歸田、門戶を了し、國の與に踐更に充つ。

普兒初學語。玉骨開天庭。　普兒、はじめて語を學び、玉骨、天庭を開く。
淮老如鶴雛。破殼已長鳴。　淮老は鶴雛の如く、殼を破つて、すでに長鳴。
舉酒屬千里。一歡愧凡情。　酒を舉げて千里に屬し、一歡、凡情を愧づ。

【字解】〔一〕嗷嗷　語り合つて騒がしき貌。〔二〕五丈夫　五人の男子、史記仲尼弟子列傳に「商瞿、年長じて子なし、孔子、これを齊に使す。瞿の母、これを請ふ。孔子曰く、憂ふるなかれ、瞿、年四十の後、當に五丈夫の子あるべし」とある。〔三〕戢戢　衆まる貌。〔四〕丁　即ち壯丁、唐書食貨志に「凡そ民、はじめて生まるるを黄となし、四歳を小となし、十六歳を中となし、二十一を丁となし、六十を老となす」とある。〔五〕錢更　漢書吳王濞傳の註に「更卒たるに當るを以て、錢三百を出す、これを過更といひ、自ら行いて卒となる、これを踐更といふ」とある。即ち兵役に出ること。〔六〕普兒　下の淮老と共に東坡の孫の名で、多分、長子邁の子であらう。〔七〕天庭　前に侍立通英の詩中に注して置いたが、人相の上で額を云ふ。

【詩意】弟子由の處と併せて、六人の男子が、嗷嗷と騒いで居るが、各〻學問をして、一經を究め、それが各〻五人の男子を生んだならば、やがて、戢戢として、みんな壯丁に成るであらう。そこで、歸田して各〻分家すると、國家の爲に、兵役に出ることと思ふ。それから、孫の普兒は、やッと物が言へる位であるが、額の角には玉骨森然として、天晴の人相であり、淮老は、鶴の雛が、やッと孵化して殼を破り、そして、長鳴するが如くである。酒杯を擧げて、千里を隔つる弟の方に差し付けたが、子孫の繁榮を喜ぶのは、愧かしながら、到底、凡情を免れぬものであらう。

【餘論】紀昀は「亦た陶に似たり」といつて居る。

淮海雖故楚。無復輕揚風。　淮海は、故楚と雖も、復た輕揚の風なし。
齋廚聖賢雜。無事時一中。　齋廚、聖賢雜はり、無事、時に一中。
誰言大道遠。正賴三杯通。　誰か言ふ、大道遠しと、正に賴る三杯の通ずるに。
使君不夕坐。衙門散刀弓。　使君、夕に坐せず、衙門、弓刀を散ず。

【字解】〔一〕淮海　即ち揚州。〔二〕故楚　史記貨殖傳に「淮より以北は、西楚なり、その俗剽輕」とあり、李濟翁の資暇錄に、「揚州は、その土俗、輕揚なるを以ての故に、其州に名づく、今、楊柳の楊に作るは謬なり」とある。〔三〕齋廚　官舍の臺所。〔四〕聖賢　清酒と濁酒。〔五〕三杯通　李白の詩に三杯通大道、一斗合自然とある。〔六〕使君　東坡自ら云ふ。〔七〕夕坐　日暮なほ役所に居ること。

【詩意】揚州の地たるや、古しへの西楚に屬すと雖も、今日では、最早、輕揚の風もなく、施政も至つて平穏である。官舍の臺所には、清酒・濁酒、兩つながら用意してあつて、ひまな時には、お好み次第、どれでも一つ、よよと參る。大道は、必ずしも遠からず、三杯飲まば、自然と其處に到達して、宇宙の玄理を悟ることが出來る。自分が晩方まで詰めて居らず、早く退出した時には、役所の門の警衛も罷めて仕舞つて、物物しいこともなく、その時こそ、大に飲むべしである。

【餘論】紀昀は「これ殊に佳ならず」といつて、大にけなして居る。

何人築東臺。一郡坐可得。　何人か、東臺を築く、一郡、坐して得べし。

亭亭古浮圖。獨立表衆惑。亭亭たる古浮圖、獨立、衆惑を表す。
蕪城閱興廢。雷塘幾開塞。蕪城、興廢を閱し、雷塘幾たびか開塞。
明年起華堂。置酒弔亡國。明年、華堂を起さば、酒を置いて亡國を弔はむ。
無令竹西路。歌吹久寂默。竹西の路をして、歌吹、久しく寂默たらしむる無かれ。

【字解】〔一〕亭亭　高き貌。〔二〕浮圖　即ち塔、梵語塔婆。〔三〕蕪城　揚州一帶の地、鮑明遠の蕪城賦に登廣陵故城一作とあつて、城は即ち吳王濞の築くところである。〔四〕雷塘　前に魏國夜游圖、及び潁州西湖成の詩中に注して置いた。〔五〕竹西路　揚州の郭外、前に劉貢父の詩中に注して置いた。杜牧の詩に誰知竹西路、歌吹是揚州とある。

【詩意】誰が東臺を築いたか知らぬが、一郡の地は、坐して眺め下すことが出來る。高い佛塔は、かなり古く、挺然として獨り聳えて居て、衆人が佛教に惑うた記念である。蕪城は、興亡を閱し、雷塘は、幾たびか開閉した。古跡を見て感慨を催すことは、ざツと、こんなものである。明年、華堂を起したならば、酒を置いて、亡國を弔はうと思ふ。何は兎まれ、風流の名ある竹西の路をして、歌吹聲なく、久しく寂默の中に在らしむるは、まことに、不本意の至である。

【餘論】紀昀は「亦た味少し」といつて居る。

晁子天麒麟。結交及未仕。晁子は天麒麟、交を結んで未だ仕へざるに及ぶ。
高才固難及。雅志或類己。高才、もとより及び難く、雅志、或は己に類す。
各懷伯業能。共有邱明恥。各〻伯業の能を懷き、ともに邱明の恥あり。
歌呼時就君。指我醉鄉里。歌呼、時に君に就いて、わが醉鄉の里を指す。
吳公門下客。賈誼獨見紀。吳公門下の客、賈誼、ひとり紀せらる。
請作鵩鳥賦。我亦得坎止。請ふ鵩鳥の賦を作れ、我、亦た坎止を得む。
行樂當及時。綠髮不可恃。行樂、當に時に及ぶべし、綠髮、恃むべからず。

【字解】〔一〕晁子　即ち晁无咎。〔二〕伯業能　英雄記に「魏の太祖稱す、長大にして能く學を勤むるものは、惟だ吾と袁伯業とのみ」とある。〔三〕邱明恥　左邱明が孔子と其恥づるところを同じうせしこと、論語に見ゆ。〔四〕醉鄉　王績の醉鄉記に「醉鄉は、中國を去ること、その幾千里なるを知らざるなり、豈に古しへ華胥氏の國ならむか」とある。〔五〕吳公門下　漢書賈誼傳に「河南の守吳公、その秀才を聞き、召して、門下に置く。文帝、吳公を徵して廷尉となすや、乃ち賈誼を言ふ、召して、以て博士となす」とある。〔六〕鵩鳥賦　上記賈誼傳の續きに「後、長沙王の太傅となる、鵩あり、飛んで誼の舍に入る、賦を爲りて以て自ら廣む」とある。〔七〕坎止　鵩鳥賦に「乘流而逝、遇坎則止」とある。

【詩意】晁无咎は、天上の麒麟といふべく、予と交を結んだが、年が若くて、未だ出仕しない。无咎の高才は、もとより及び難く、風雅なる好尙は、或は予に類して居る。予と彼と、各〻古しへの袁伯業の如き才能を懷き、そして、左邱明と同じく、孔子の恥づるところを矢張恥として居る。予は、醉中に歌呼しつつ、時に君に就いて、わが醉鄉を指し、ともに醉はむことを勸めるを例とした。むかし、賈誼は、吳公の門下より出でて、ひとり、推擧されたが、予も亦た、君の爲に、一肌ぬいで力を盡さ

うと思つて居る。しかし、今の世の有様では、仕方がないので、君に鵩鳥の賦を作つて貰ひたい位、さうすれば、予も亦た坎に遇うて止まり、何事も運命と諦めやう。げにや、行樂は時に及ぶべく、君の如き綠髪も、決して恃むことが出來ぬから、兎に角、ここで酒を飲むが善からう。

【餘論】紀昀は「陶意、多きに居る」といつて居る。

蓋公偶談道。齊相獨識眞。
頹然不事事。客至先飲醇。
當時劉項罷。四海瘡痍新。
三杯洗戰國。一斗消强秦。
寂寥千載後。陽公嗣前塵。
醉臥客懷中。言笑徒多勤。
我時閱舊史。獨與三人親。
未暇餐脫粟。苦心學平津。
草書亦何用。醉墨淋衣巾。
一揮三十幅。持去聽坐人。

蓋公、偶ま道を談じ、齊相、ひとり眞を識る。
頽然として、事を事とせず、客至れば、先づ醇を飲む。
當時、劉項罷み、四海、瘡痍新なり。
三杯、戰國を洗ひ、一斗、强秦を消す。
寂寞たり千載の後、陽公、前塵を嗣ぐ。
醉うて客の懷中に臥す、言笑、徒に多勤。
われ時に舊史を閲し、ひとり、三人と親む。
未だ脫粟を餐し、苦心、平津を學ぶに暇あらず。
草書、亦た何の用、醉墨、衣巾に淋ぐ。
一揮三十幅、持し去つて坐人に聽す。

【字解】〔一〕蓋公　下を見よ。〔二〕齊相　漢書曹參傳に「齊の相國となる。膠西の蓋公、爲に言ふ、治道は清靜を貴び、民、自ら治まると。故に齊に相たること九年、齊國安集す。宰相となるに及びて、日夜酒を飲む。賓客、參の事を事とせざるを見て、言ふあらむと欲す。至るものは、參、輒ち飲ましむるに醇酒を以てし、醉うて後に去り、終に開說を得るなし」とある。〔三〕陽公　唐書陽城傳に「諫議大夫となり、日夜劇飲す。客、諫止せむと欲するもの、城、その情を揭り知り、强ひて客に飲ましむ。客、辭すれば、卽ち自ら滿を引き、或は先づ醉うて客の懷中に臥す」とある。〔四〕三人　蓋公・曹參と陽城。〔五〕餐脫粟　漢書公孫弘傳に「丞相となつて、平津侯に封ぜらる。身、一肉、脫粟飯を食す」とある。脫粟とは、唯だ一度搗いて上の皮殼だけを去りし粟。〔六〕持去聽坐人　南史齊高帝諸子傳に「新浦侯子雲、草隸を善くす。百濟、人をして書を求めしめて曰く、侍中尺牘の美、遠く海外に流る。今日、求むるところは、惟だ名跡に在り、と。子雲、三十紙に書して、之を與ふ」とある。

【詩意】蓋公は、偶然、老莊の道を高談したが、曹參は、ひとり、その眞義を默識し、平居頽然として、事を事とせず、客至らば、先づ醇酒を飲ましめた。當時、漢楚の爭が、やッと畢つたばかりで、四海の人民、瘡痍なほ新にして未だ治せず、そして、曹參は、三杯飲んで戰國の風塵を洗ひ、一斗にして强秦を消し、やがて、別天地に逍遙する樣な心持。曹參歿後、殆んど千年、寂寞として然るべき人も無かつたのに、陽城が出て來て、前例を承け嗣ぎ、醉へば客の懷中に就いて睡ることさへあつて、言笑するのは御苦勞だといふので、何でも、醉ひ潰れるのを極致として居た。予は、時時、古史を閲し、この三人を最も慕はしいものとして、これに私淑し、かの公孫弘の如く、脫粟の飯を食つて、節儉、その身を持し、頻りに苦心する樣な眞似をする暇だになかつた。草書は何の用を爲すか、唯だ醉中の墨痕が衣巾に灑ぎかかつて、これを汚すだけである。しかし、欲しいといふ人があつたから、

一氣呵成に、三十幅を書きなぐり、座上の人に分けて、勝手に持ち返らしめた。

【餘論】紀昀は、三杯洗二戰國一の二句を評して「殊に大雅を傷る」といひ、言笑の句も「亦た自然ならず」といつた。なほ連作二十首の總評として「才を斂めて陶に就き、亦た時時本色を露はす、正に褚が蘭亭を摹して、頗る己の法を參し、しかも、正に是れ、その摹處に善きが如し、明七子の古を摹するは、雙鉤塡廓に過ぎざるのみ」といつて居る。なほ元遺山には、この詩の後に跋する短文があつて「東坡の和陶、氣象祇だ是れ東坡、三杯洗二戰國一、一斗消二强秦一の如き、淵明、決して辨ずる能はず、ひとり恨む、空杯亦嘗持の句、無絃琴を論ずるものと自ら相矛盾するを。別に一詩に云ふ、二子眞我客、不レ醉亦陶然、これを佳となす」と記して居る。

次韻晁无咎學士相迎

晁无咎學士の相迎ふるに次韻す

少年獨識晁新城。
閉門却掃卷旆旌。
胸中自有談天口。
坐却秦軍發墨守。
有子不爲謀置錐。
虹霓吞吐忘寒飢。
端如太史牛馬走。
嚴徐不敢連尻脽。
裘徊未用疑相待。
枉尺知君有家戒。
避人聊復去瀛洲。
伴我眞能老淮海。
夢中仇池千仞巖。
便欲攬我青霞幨。
且須還家與婦計。
我本歸路連西南。
老來飲酒無人佐。
獨看紅藥傾白墮。
每到平山憶醉翁。

少年、ひとり識る晁新城、
門を閉ぢて却掃、旆旌を卷く。
胸中自ら談天口あり、
坐して秦軍を却けて、墨守を發す。
子あり、爲に置錐を謀らず、
虹霓、呑吐して寒飢を忘る。
端として、太史牛馬走の如く、
嚴徐、敢て尻脽を連ねず。
裘徊、未だ用ひられず、疑うて相待つ、
尺を枉ぐ、知る君が家戒あるを。
人を避けて、聊か復た瀛洲に去り、
我を伴うて、眞に能く淮海に老ゆ。
夢中の仇池、千仞の巖、
便ち我が青霞幨を攬せむと欲す。
且つ須らく家に還つて婦と計るべし、
われ本と歸路、西南に連る。
老來、酒を飲んで人の佐くるなく、
獨り紅藥を看て白墮を傾く。
平山に到る毎に醉翁を憶ふ、

【字解】〔一〕晁新城　晁端友、字は君誠、東坡が杭州に守たりし時、新城の令であつた、その子が即ち无咎である。〔二〕閉門却掃　前に與二周李一游二徑山一の詩中に注して置いた。〔三〕卷旆旌　旆旌は大官の行列の先頭に立てる旗、それを卷くといへば、其處に暫時立ち寄ること。〔四〕談天口　七略に「田駢の辯、その口、天の如し、人、これが語を爲して曰く、田駢天口」とある。〔五〕却秦軍　前に維摩像の詩中に注して置いた。魯仲連が新垣衍に語るに、秦を帝とすべからざるの事を以てし、秦軍が之を聞いて三十里退却したといふこと。〔六〕墨守　墨翟が公輸般と爭うて、九たび拒いで城を守つたといふこと。〔七〕置錐　莊子に「堯舜、天下を有して、子孫、錐を置くの地なし」とある。子孫に、わづかでも財産として田地を殘し置くこと。〔八〕太史牛馬走　司馬遷の任安に答ふる書に、太史公牛馬走とある。太史公は遷の父、名は談、自ら太史公の牛馬の僕と稱したのである。〔九〕戟徐　文選任彥昇の來レ答二敎示一七夕詩一啓に、比二嚴徐一而待レ詔とあつて、その註に嚴安徐樂とある。〔一〇〕連尻脽

懸知他日君思我。　懸に知る、他日、君が我を思ふを。
路旁小兒笑相逢。　路旁の小兒、笑うて相逢ふ、
齊歌萬事轉頭空。　齊しく歌ふ、萬事轉頭空しきを。
賴有風流賢別駕。　賴に風流の賢別駕あり、
猶堪十里卷春風。　なほ、十里、春風に卷くに堪へたり。

天筵上將軍となり、文學館を作り、賢才を敎聘し、杜如晦等を以て學士となし、見そ三番に分つて閣下に遷宿せしめ、暇日ごとに、訪ふに故事を以てし、墳籍を討論し、聞立本に命じて圖象し、亮たして之が贊を爲らしめ、名字爵里を題し、十八學士と號し、これを書府に藏す。この時に方つて、選中に在るものは、天下の慕向するところにして、これを登瀛洲といふ」とある。【三】老龍海　无咎が揚州の倅たるを云ふ。【三】夢中仇池　前に雙石の題下に見ゆ。【四】青霞輪　舞名に「牀前の帷を輪といふ」とある。【五】連西南　杜甫の仇池の詩に近接「西南望長懷十九泉」とある。【六】紅藥　芍藥。【七】白墮　酒の名、前に次韻雪中憶梅の詩中に注して置いた。【八】平山　堂の名、揚州大明寺に在つて、もと歐陽公の建設に係る。【九】賢別駕　无咎を指して云ふ。【三〇】十里卷春風　前に吉祥寺賞牡丹の詩中に注して置いた。

【題義】續通鑑長編に「元祐五年十二月、校書郎晁補之、揚州に通判たり。七年十月、著作佐郎となる」とあつて、東坡が揚州に著任した時は、丁度、その地に在官して居たから「東坡先生、移つて廣陵に守たり、詩を以て先生を迎ふ」と題せる七古一篇を作つて捧呈した。そこで、東坡は、次韻して、その厚誼を謝したのである。

【詩意】少年の時、君の御親父の新城令を面識して居たが、その人は、門を閉ぢて掃除をなし、時に大官輩が行列を留めて訪問することもあつた。そして、胸中に蘊蓄あつて、その雄辯は、かの談天口と稱せられた古しへの田駢に類し、又魯仲連の如く、坐ながらにして秦軍を退け、墨翟の堅く城守して居るのをも衝き崩さむばかり。そして、君の樣な立派な息子があつても、貧錐の地程の遺產を殘さうともせず、君は意氣浩然、虹霓を呑吐して寒飢をも忘れ、端然として、太史公の牛馬の僕を以て自ら甘んじ、嚴安・徐樂の如きものは、その尻に續くことも出來ない。君は、折角仕官したが、愚圖愚圖して、未だ大に用ひられず、竊に其機會を待つて居るものと見えるが、たとひ、少しでも、おのが操守を枉げて、世に媚ぶるのは、家訓として嚴禁するところである。そこで、人を避けて登瀛洲に向はむとし、わが下役になつて、この揚州の地に老いむとして居る。予は、夢に仇池に游んで、千仞の巖に登つたこともあるが、君は予が青霞の帷を搴げて押し入り、一緒に其地に行きたい樣な安排。しかし、その事は、家に歸つて、篤と妻君に相談するが善いので、これより、予が行かうとする路は、西南に連つて、はてもなく、一たび去れば、何時歸るか分からない。それは拠て置き、老來、酒を飲むにも、相手がなく、仕方がないから、獨り芍藥の花を眺めて、白墮の美酒を傾けて居る。予は平山堂に到るごとに、歐陽公を追憶するが、他日、その如く、君も亦た予を思ふであらう。路傍の小兒は、予に逢へば、笑ひつつ、萬事は轉頭空しといふ樣の意味の歌を一齊に歌ひ囃して居る。ただ幸に、君の如き風流を解する下役があるから、十里の珠簾、春風に卷くといふ名だたる揚州の芍藥を飽くまで

賞覧しやうと思つて居る。

【餘論】紀昀は全首を評して「語多くは凡近、調亦た平衍」といひ「尻脽、強ひて押す」といつて居る。

次韻范淳父送秦少章

宿緣在江海。世網如予何。
西來庾公塵。已濯長淮波。
十年淮海人。初見一麥禾。
但欣爭訟少。未覺舟車多。
秦郎忽過我。賦詩如卷阿。
句法本黃子。二豪與揩磨。
嗟我久離羣。逝將老西河。
後生多名士。欲薦空悲歌。
小范眞可人。獨肯勤收羅。
瘦馬識騄耳。枯桐得雲和。
近聞館李生。病鶴借一柯。
贈行苦說我。妙語慰蹉跎。
西羌已解仇。烽火連朝那。
坐籌付公等。吾將寄潛沱。

范淳父の秦少章を送るに次韻す

宿緣、江海に在り、世網、予を如何。
西來、庾公の塵、すでに濯ふ長淮の波。
十年淮海の人、はじめて見る一麥の禾。
但だ爭訟の少きを欣ぶ、未だ覺えず舟車の多きを。
秦郎、忽ち我を過ぎ、詩を賦して卷阿の如し。
句法、黃子に本づき、二豪、ともに揩磨。
嗟す、我が久しく離羣、逝いて將に西河に老いむとす。
後生、名士多く、薦めむと欲して空しく悲歌す。
小范、眞に可人、ひとり肯て收羅を勤む。
瘦馬、騄耳を識り、枯桐、雲和を得たり。
近ごろ聞く、李生を館し、病鶴、一柯を借すと。
贈行、苦に我に說き、妙語、蹉跎を慰む。
西羌、すでに仇を解き、烽火、朝那に連る。
坐籌、公等に付す、吾、將に潛沱に寄せむとす。

【字解】〔一〕世網　世事網の如く、一たび之に嬰れば解き去る能はざるを云ふ。〔二〕庾公塵　前に次韻王廷老退居この詩中に注して置いた。王導が西風の來る毎に、扇を擧げて之を障り、元規の塵、人を汚すといつたこと。元規は、庾亮の字。〔三〕一麥禾　春秋、莊公二十八年に「大に麥禾なし」とある。十年一麥禾を見るとは、久しく登豐せざるを言ふ。〔四〕秦郎　卽ち少章。〔五〕卷阿　詩經の篇名、康公が成王を戒めて、賢を求め、吉士を用ひよといふ意を述べた詩。〔六〕黃子　東坡の自註に「魯直を謂ふなり」とある、卽ち黃山谷。〔七〕二豪　東坡の自註に「その兄少游と張文潛」とある。〔八〕揩磨　扶ひ且つ磨く。〔九〕西河　史記仲尼弟子列傳に「卜商、字は子夏。孔子すでに歿し、子夏、西河に居て教授し、魏の文侯の師となる」とある。〔一〇〕小范　范醇甫を指す。〔一一〕騄耳　馬の名、周の穆王八駿の一。〔一二〕雲和　周禮に「孤竹の管、雲和の琴瑟」とあつて、琴瑟の材は、雲和の山に生ずる桐を以て第一としてある。〔一三〕李生　東坡の自註に「李廌方叔」とある。〔一四〕西羌　卽ち夏、續通鑑長編に「元祐七年十月、西賊、攻めて環州を圍み、凡そ七日にして解き去る」とある。〔一五〕朝那　漢書地理志に「安定郡朝那縣は、故の戎の那邑なり」とある。〔一六〕坐籌　居ながら謀を回らすこと、漢書項籍傳に「坐して籌策を運らすは、公、我に如かず」とあり、高祖本紀に「帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾、子房に如かず」とある。〔一七〕潛沱　王註に「潛沱は成都の水名、先生言ふ、吾、ここに歸休せむ」とある。

【題義】老學庵筆記に「范祖禹、字は淳の一字、交友、その呼び難きを以ての故に、父の字を增す」

とある。又續通鑑長編に「元祐七年六月、禮部侍郎范祖禹、翰林學士となる」とあつて、それは、丁度この時頃と思はれる。秦少章は少游の弟。この詩は、秦少章が來訪して、范祖禹の送行の詩を見せたから、乃ち之に次韻したのである。

【詩意】予の江海に於ける、切つても切れぬ夙緣があつて、世事網の如く、予を如何にしやうといふのか。西風と共に吹き來りし元規の塵は、長淮の水に濯はれて、やッと、さッぱりしたが、十年の久しき、凶年つづきで、初めて麥の取り入れに遇つたといふのは、まことに歎息の至。ただ境内安靜にして、訴訟の少きは、尤も喜ぶべく、又舟車で來訪するものの多いことも、格別厭と思はぬ位である。ここに、秦少章が來訪して、詩を作つて見せられたが、さながら、卷阿の古詩の如く、しきりに、賢を薦めよといつて囑付せられた。君が詩を作るに當つて、句法は黃山谷に本づき、そして、秦少游・張文潛の二豪と平生研磨して居るさうで、その出來榮えの善いのも、もとより偶然ではない。しかし、予は久しく羣を離れて、孤獨の境涯に居り、やがて、子夏の西河に於けるが如く、隱居して講學を務めたいと思つて居る。後進の中には、名士が多いから、出來るだけ推薦しやうとは思つて居るが、何分、おもふ樣に成らずして、空しく悲歌するのみである。范君は、誠に結構な人で、ひとり、さういふ人人を收めて羅致せむことを務められ、ここに少章の爲に盡力されるのは、瘦馬の中より騄耳の如き名馬を識別し、枯れた桐の木の中から雲和の良材を得られた樣なものである。近ごろ承れば、李廌といふものを宅に置いたといふが、そは病める鶴に、とまるに善い樣な枝を借したと同じである。

そして、少章發程の際に贈られた詩の中には、懇に予の事を說いて居られ、それを見ると、妙語は、予の不遇を慰めるに十分である。今しも、西邊の夏國は、わづかに圍を解いたといふが、烽火は、朝那の地方に連つて居る。そこで、坐ながら籌を帷幄の中に運らすことは、諸君に一任すべく、予は、遠からず官を辭して、跡を潛沱の水邊に寄せる積りである。

【餘論】紀昀は「典重の氣あり、平に似て平に非ず」といひ、小范眞可人の句に關しては「私意を點出す、古法」といつて居る。

聞林夫當徙靈隱寺寓居、戲作靈隱前一首。

林夫、當に靈隱寺の寓居に徙るべしと聞き、戲に靈隱前の一首を作る

靈隱前。天竺後。　靈隱の前、天竺の後、
兩澗春淙一靈鷲。　兩澗の春淙、一靈鷲。
不知水從何處來。　知らず水は何處より來るかを、
跳波赴壑如奔雷。　跳波、壑に赴いて奔雷の如し。
無情有意兩莫測。　無情有意、兩つながら測るなし、
肯向冷泉亭下相　肯て冷泉亭下に向つて相藥回。

【字解】〔一〕兩澗。圖經に「杭州靈山の陰、北澗の陽は、卽ち靈隱寺。靈山の南、南澗の陽は、卽ち天竺寺。二澗の流水は、錢源泉と號し、寺峰の南北を繞つて下り、峰前に至り、合して一澗となる、橋あり、合澗橋と號す」とある。〔二〕靈鷲。寺の名、釋氏稽古略に「西天竺の惠理法師、晉の咸和中に於て杭州に至

榮回。

我在錢塘六百日。　われ、錢塘に在る六百日、
山中暫來不暖席。　山中、暫く來つて席を暖めず。
今君欲作靈隱居。　今、君、靈隱の居を作さむと欲す、
葛衣草屨隨僧蔬。　葛衣草屨、僧蔬に隨ふ。
能與冷泉作主一　能く冷泉と主と作る一百日、
百日。

不用二十四考書。　用ひず二十四考、中書と書するを。
中書。

【題義】林夫は唐堈の字。この人の事は、和二唐彥猷詩一送二其子堈一の詩中に注して詳いた。この詩は、唐林夫が、近日中、靈隱寺の寓居に徙るべき由を聞き、戲に靈隱前と題して、はるかに之に寄せたのである。

【詩意】靈隱寺の前、天竺寺の後、兩派の春の谷川が流れて、そこに靈鷲寺がある。その谷川の水は、何處から來るか分からぬが、跳れる波は、壑中に赴き、その響は、奔雷の如く騷がしい。水、果して情なきか、心あるか、兩つながら、料り知ることは出來ないが、縈り回つて、冷泉亭下に向つて行くことを解して居る。われ杭州に在ること一年有餘、その山中には、一寸往つただけで、席を暖める暇だに無かつた。君は、今、靈隱の寓居に徙られるさうだが、葛の單衣を著け、草屨を穿き、そして、精進物を食つて行ひ澄まされるであらう。かくて、豫定通り、三個月の久しい間、冷泉の爲に主人となつて居れば、復た遺憾なかるべく、何も郭子儀の如く、忙しげに立ち廻つて、二十四回も、中書令考を校する樣な身分に成らずとも善からうと思はれる。

【餘論】紀昀の評に「太白の皮毛を得たり、然れども、頗る野調に近し」とある。

滕達道挽詞　二首

先帝知公早。虛懷第一人。　先帝、公を知ること早し、虛懷第一の人。
至今詩禮將。獨數武宣臣。　今に至つて、詩禮の將、獨り數ふ、武宣の臣。
材大難用。時來亦少信。　材大にして用ひ難しと雖も、時來つて、亦た少しく信ぶ。
高平風烈在。威敏典刑新。　高平、風烈あり、威敏、典刑新なり。
空試乘邊策。寧留相漢身。　空しく邊に乘ずるの策を試み、寧ろ漢に相たるの身を留め[めむや。]
淒涼舊部曲。淚溼塚前麟。　淒涼舊部曲、淚は溼ふ塚前の麟。

り、山巖の秀麗を見て曰く、吾が國、中天竺靈鷲山の十小洞、知らず、何の年か飛び來ると。洞あり、鷲と白猿あり、これを呼べば、聲に應じて出づ。人、はじめて之を信ず。師、その地に即いて兩刹を建つ、先は靈鷲、後は靈隱」とある。【三】冷泉亭　圓經に「飛來峰下に在り。唐の右司郎中、杭州刺史元面建つ」とある。【四】二十四考書中書　唐書に「郭子儀、身を以て天下の安危を爲すこと二十年、中書令考を校すること二十四」とある。

【字解】〔一〕先帝　神宗皇帝を云ふ。〔二〕武宣臣　武帝と宣帝、兩漢極盛の世。〔三〕材大　前に和木山引水の詩中に注して置いた。〔四〕亦少信　信は伸に通ず。〔五〕高平　范文正公書伯夷頌に、高平范仲淹書と題してあつて、高平は、澤州の郡名。滕元發は、范文正公の外孫であつたから、自然その遺風を傳へたといふ意。〔六〕威敏　東坡の自註に「公、少にして知を范希文・孫元規に受く」とあつて、東都事略に「孫沔、字は元規、奇精の人、人と爲り明敏果決、致仕して、龍文殿學士に終り、威敏と謚す」とある。〔七〕秉澄　秉は守る。〔八〕相國身　漢書王商傳に「河平四年、單于來朝す。丞相商、未央延中に坐す。單于、商の貌を仰ぎ觀て、大に之を異る。天子聞いて、歎じて曰く、これ眞に漢相」とある。〔九〕郃曲　郃隊。〔一〇〕塚前麟　墓の前に捌ゑ付けて置く石造の麒麟。杜甫の詩に、苑邊高冢臥麒麟とある。

【題義】滕達道、名は甫、字は元發、後避くるところあつて、字を以て名とし、達道を字とした。その事歴は、東坡の撰んだ墓誌に詳しい。續通鑑長編、元祐五年十月の條に「滕元發卒す、右銀青光祿大夫を贈り、章敏と謚し、錢三十萬を賜ふ。王巖叟が、元發、都城の外に卒し、家に餘貲なしと言ふを以てなり」とある。なほ、この人は、元祐五年に卒したのに、ここ七年の處に、その挽詞を編入したのは、一寸譯が分からないが、姑らく査氏の舊に沿うたのであらう。

【詩意】先帝は、公を知ること頗る早く、虛懷第一の人として敬重された。君は、詩書禮樂に精通し、天晴、昇平の世の能臣たるべきものであつた。材大にして、十分に用ひられることは、六つかしかつたが、時機が來て、少しく伸ぶることを得たのは、まだしもの幸である。君は、范文正公の遺風を存し、又孫威敏の典型を傳へ、まことに堂堂たる文武の全才であつた。しかし、邊境を守る策を上つても、未だ試用されるに及ばず、眞に漢の相なりといはれる樣な風采も、今は見ることが出來ない。

そこで、當日の部下たりし兵士どもは、追慕して止まず、その涙は迸つて、墓前の石麟を溼すばかりである。

【餘論】紀昀は「挽詩、例、應酬多し、これ獨り之を言ふに物あり」といつて居るが、なる程、內容充實して、悽惋の中に典麗の致を具へて居る。

雲夢連江雨。樊山落木秋。〔一〕
公方占賈鵬。〔二〕我正買龔牛。〔三〕
共有江湖樂。俱懷畎畝憂。
荆溪欲歸老。〔五〕浮玉偶同游。〔六〕
骯髒儀刑在。〔七〕驚呼歲月遒。
回頭雜歌哭。挽語不成謳。

【字解】〔一〕雲夢　王註には湖州常州の地とあるが、馮應榴は、黃州安州と訂正するが善からうと云つて居る。〔二〕樊山　鄂州武昌縣に在る、元發が落職して池州に知たりし時、東坡は黃州に謫せられ、しきりに尺牘で往復したことがある。〔三〕占賈鵬　漢書賈誼傳に「長沙王の太傅となる、三年、鵩あり、飛んで誼の舍に入る、書を發して之を占す、その度を言うて曰く、野鳥室に入る、主人將に去らむとす」とある。〔四〕買牛　買勝、劍を賣つて牛を買ふ。前に山村五絶の詩中に注して置いた。〔五〕荆溪　常州圖經に「宜興縣に在り」と見え、前に常潤道中の詩中に注して置いた。東坡は元發と、後日、ここに歸隱することを約したと見える。〔六〕浮玉

即ち金山、前に擬〻金山〻の詩中に注して置いた。【七】 憤懣　不遇不平の意。

【詩意】 雲夢の澤水が大江に連り、蕭蕭として雨そぼふる時、樊山に落葉の亂るる秋、兩地相思の情に堪へなかつたことがある。その時、君は賈誼の如く、鵩鳥の室に入るを卜して、自ら久しく其地に留まらざるを知り、予は、魏生の如く、刀を賣つて牛を買ひ、やがて、躬耕以て老を送る積り。ともに、江湖の樂はあつたが、畎畝に在つても、なほ君國の憂を懷いて居た。行く末は、一緒に、荆溪に歸老せむことを約し、そして、金山には、偶然、同游を試みた。君は、不遇不平であつたが、堂堂たる風采は、いつも變らず、今しも、歲月の打過ぎしを見て、予は、おもはず、驚呼せむばかり。頭を回らせば、歌笑相雜り、悲挽の語も、まとまり兼ねて、一篇の詩を成さぬは、われながら、愧ぢ入るばかりである。

【餘論】 二首、ともに五言排律であるが、對偶に拘泥せずして、頗る流利自在、まことに、大家の手筆に負かぬものである。

次韻蘇伯固遊蜀岡送李孝博奉使嶺表

蘇伯固の蜀岡に遊んで、李孝博の使を嶺表に奉ずるを送るに次韻す

新苗未沒鶴。老葉方翳蟬。　新苗、未だ鶴を沒せず、老葉、方に蟬を翳す。
綠渠浸麻水。白板燒松煙。　綠渠、麻を浸すの水、白板、松を燒くの煙。
笑窺有紅頰。醉臥皆華顛。　笑うて窺ふ、紅頰あり、醉臥、皆華顛。
家家機杼鳴。樹樹梨棗懸。　家家、機杼鳴り、樹樹、梨棗懸る。
野無佩犢子。府有騎鶴仙。　野には、犢を佩ぶるの子なく、府には、鶴に騎するの仙あり。
觀風嶠南使。出相山東賢。　觀風、嶠南の使、出相、山東の賢。
渡江弔很石。過嶺酌貪泉。　江を渡つて很石を弔ひ、嶺を過ぎて貪泉を酌む。
與君步徙倚。望彼修連娟。　君と步して徙倚たり、かの修く娟を連ぬるを望む。
願及南枝謝。早隨北雁翩。　願はくは、南枝の謝するに及び、早く北雁に隨つて翩たれ。
歸來春酒熟。共看山櫻然。　歸り來つて、春酒熟せば、共に山櫻の然ゆるを看む。

【字解】 【一】 沒鶴　韓愈の稻畦の詩に、魚肥知〻己秀、鶴沒覺〻秋深とある。【二】 翳蟬　葉の裏に蟬の付くこと、庾信の小園賦に蟬有〻翳分不〻驚とある。【三】 白板　白居易の詩に壹扉篇〻白板〻とある。【四】 華顛　白髮頭。【五】 騎鶴仙　古語に「鶴に騎して揚州に下る」とあり、この時、東坡は揚州に居たから自ら稱したのである。【六】 觀風　風俗を視察する、禮記に「太師に命じ、詩を陳して、以て民風を觀る」とある。【七】 嶠南　即ち嶺南。【八】 很石　孫權の惡の石、前に甘露寺の詩中に注して置いた。【九】 相山東賢　李孝博は山東の人にして、又相家の子なるが故に云ふ。【一〇】 貪泉　晉書吳隱之傳に「廣州刺史となる、未だ州に至らざる三十里、地を石門と名づく、水あり、貪泉といふ、飲むもの、厭くなきの心を懷く。隱之、すでに至り、乃ち泉の所に至り、酌んで之を飲み、詩を賦して曰く、古人云此水、一歃懷〻千金〻試使〻夷齊飲〻終當〻不〻易〻心とある。【一一】 徙倚　跚跚する。【一二】 修連娟　長く遠山の娟を連ぬる。【一三】 山櫻　沈約の詩に野棠開未〻落、山櫻發欲〻然とある。

【題義】蘇伯固、名は堅、前に元祐五年の題註に見ゆ。盛儀の維揚志に「蜀岡は、江都縣西に在り、儀眞の界に接す」とあり、又「禪智寺の側を崑邱臺と爲す、卽ち蜀岡なり」とある。李孝博、字は叔升、時に山陽の守より、治行高第を以て廣東提點刑獄に拜せられた。嶺表は、卽ち嶺南。この詩は、蘇伯固が揚州の蜀岡に游び、そして、李孝博が廣東提點刑獄となつて、嶺南に赴任するを送る爲に作つた詩に次韻したのである。

【詩意】頃しも夏の半、新苗は、まだ鵲を隱す程には伸びず、老葉は、裏に蟬を止まらせて居る。溝渠の綠水には、麻の莖を浸し、人家の白板扉からは、松を燒く煙が白く立ち昇つて居る。笑つて戶外を偸み窺ふは、頰の紅い田舍娘であるし、醉臥して居るのは、白髮頭の老爺である。どこの家でも、機を織る杼が鳴り響き、梨や棗の木には、丁度、實がなつて居る。野には、子牛を連れて行く童もあり、役所には、仙人の如く、鶴に騎して此地に下つたといつて得意がる長官が居る。君達の見た西岡の景色は、かくの如く、まさしく、暢氣至極である。李君は、風俗を視察する爲に、遠く嶺南に派遣せられ、もとを質せば、山東相家の子で、天晴な大賢である。これより、江を渡つて南京に至らば、かの孫權の怨の石を弔ふべく、五嶺を越えると、音に聞く貪泉を酌んで飲むであらう。今、蘇君と歩みつつ躑躅し、かの遠山の長く續くを眺めると、その先の又先が卽ち李君の行かれる處である。願はくは、來年、梅花の散り落つる頃、北に向ふ雁と共に歸つて來るが善いので、その時しも、春酒が方に熟したならば、ともに、山櫻の燃ゆるが如く咲き出でたるを看賞しやうと思ふ。

【餘論】苕溪漁隱叢話に「西岡に游ぶの詩、造語、全く退之の城南聯句、新苗の八句に效ふ。退之の筆力と雖も、殆んど以て之に過ぐるなし」とあり。乾隆御批には「離離蔚蔚、雲霞澄鮮」とある。しかし、紀昀は「句皆琢鍊、但だ深味に乏し」といつて、例の如く聊か之をけなして居る。

太夫人以无咎生日置酒、書壁一絕

太夫人、无咎の生日を以て酒を置く、壁に一絕を書す

壽樽餘瀝至朋簪。　壽樽の餘瀝、朋簪に至る、
要與郎君夜語深。　郎君と夜語、深からむを要す。
敢問阿婆開後閣。　敢て問ふ、阿婆、後閣を開き、
井中車轄任浮沈。　井中の車轄、浮沈に任すかを。

【字解】〔一〕壽樽　お祝ひの酒。〔二〕朋簪　杜甫の詩に、朝來慶壽簪とある。〔三〕夜語深　一に、語夜深とあつて、その方が分かり易い。〔四〕阿婆　南史鄱林王紀に「帝、象章王の妃庾氏に謂つて曰く、阿婆、後閣　奥座敷。〔五〕井中車轄　陳遵、酒を好み、客を留めむが爲に、車轄を井に投じて歸らしめなかつたといふこと。前に和二柳子玉喜雪一、及び蘇州太守の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、晁氏の太夫人楊氏が其子无咎の誕生日に御馳走をしたから、取り敢へず、賦して、その家の壁に題したのである。

【詩意】お祝の酒の殘れるを朋友輩に振舞はれ、令息と深夜まで語り續けよとの御志は、まことに

辱い。御老母は、態態、奥座敷を開いて、我等を導き入れ、井中に投じた車轄は、その浮沈に任かせて、いつまでも留め置かれるのであらうか。

石塔寺

世傳王播飯後鐘詩、蓋揚州石塔寺事也、相傳如此、戲作此詩、

【訓讀】 世傳ふ、王播の飯後鐘の詩は、蓋し揚州石塔寺の事なりと。相傳ふる、かくの如し、戲に此詩を作る。

飢眼眩東西。詩腸忘早晏。
雖知燈是火。不悟鐘非飯。
山僧異漂母。但可供一莞。
何爲二十年。記憶作此訕。
齋廚養若人。無益祇貽患。
乃知飯後鐘。闍黎蓋具眼。

【字解】 【一】雖知燈是火　王註に「說者謂ふ、往時、寺僧賢を禮する能はず、今に至つて、その徒、飯後の鐘を以て作となす。今、先生の詩意、言ふ、播、特に鐘を以て路に迷ひ、直に寺中に往くを知らず、貧にして詩を吟じて時を失ひ、時に頼つて、往いて飯するを知らず、諺に云ふ、早知燈是火、飯熟已多時」とある。【二】漂母　漢書に「韓信家貧、城下に至つて釣す。一漂母あり、これを哀んで信に飯し、漂を竟るまで數十日。信、漂母に謂つて曰く、吾、必ず重く母に報いむ。母怒つて曰く、大丈夫、自ら食ふ能はず、われ王孫を哀んで食を進む、豈に報を望まむや」とある。【三】此訕　訕は毀謗。【四】闍黎　傳燈錄に「鄧州丹霞禪師、僧あり、山下に於て師を見る。師、僧に問ふ、什麼の處にか宿す。云ふ、山下に宿す。師曰く、什麼の處にか飯す。曰く、山下に飯を喫す。師曰く、飯を將て闍梨と喫する底の人は、還た具眼なり」とある。翻譯名義集に「梵に云ふ阿闍梨、ここに云ふ軌範師、又云ふ悅衆」とある。

【題義】 摭言に「王播、少にして孤、かつて、揚州惠照寺の木蘭院に客たり、僧に隨つて粥食す。これに久しうして、僧、頗る厭ふ。一日、播、出でて度して、未だ回らざるに、先づ飯し訖り、乃ち鐘魚を鳴らす。播、江都に鎮し、因つて舊游を訪ふに、題するところの字、皆紗これを罩む。因つて、詩を留めて曰く、上堂才子各西東、慚愧闍梨飯後鐘、二十年來塵撲面、而今始得碧紗籠」とあり。唐書本傳に「播、字は明敭、その先は太原の人、父恕、揚州倉曹參軍となり、遂に家す。播、貞元中、弟炎起と皆名あり、竝に進士に擢んでられ、官、同中書門下平章事に至り、出でて淮南節度使となる」とある。引の意味は――世に傳ふるところの王播が慚愧闍梨飯後鐘といふ詩を作つたのは、蓋し揚州の石塔寺だといふことで、相傳ふること、かくの如くである、そこで、戲に此詩を作つたといふのである。

【詩意】 王播の寺に寓居せし時、飢に苦むの極、目がくらんで、東西を分たず、徒に詩を吟じて、時の遲速をさへ忘れ、燈は是れ火なるを知るも、鐘は飯を報ずるに非ず、とツくの昔に飯の濟んだといふことを悟らなかつた。無論、山僧は、漂母と異にして、王孫を哀むを知らず、かうして追ひ拂つ

たことは、まことに、一笑に供すべきものである。然るに、王播は、二十年後、なほ其事を記憶し、厭味たップぷりな詩を作つて寺僧を譏つたのは、如何なる故か、あまり、執念深いではないか。實際、寺の臺所に於て、かういふ人を養つて置くと、些少の益だになくして、唯だ憂を貽すのみである。されば、早く飯を食つて、その後で鐘を鳴らしたといふのも、畢竟、阿闍梨たる執事僧が具眼者であつたからであらう。

【餘論】紀昀は「翻案、却つて至理あり」といつて居る。

送晁美叔發運右司年兄赴闕　晁美叔發運右司年兄の闕に赴くを送る

我年二十無朋儔。　われ年二十、朋儔なし、
當時四海一子由。　當時、四海一子由。
君來扣門如有求。　君來つて、門を扣いて求むるあるが如し。
頎然鶴骨清而修。　頎然たる鶴骨、清にして修。
醉翁遣我從子游。　醉翁、われをして子に從つて游ばしむ、
翁如退之蹈軻邱。　翁は退之の如く、軻邱を蹈む、
尚欲放子出一頭。　尚ほ子を放つて、一頭を出さしめむと欲す。

【字解】〔一〕頎然　丈高き貌、詩經に碩人其頎とある。〔二〕醉翁　歐陽修自ら號して云ふ、前に屢ば見る。〔三〕蹈軻邱　軻は孟子の名、邱は孔子の名、孔孟の道を蹈む。〔四〕放子出一頭　東坡の自註に「蘇軾の初、軾、子由と興國浴室に寓す。美叔、忽ち訪はる。云ふ、吾、歐陽公に從つて游ぶこと久し、公、我をして、來つて子と交を定めしむ。謂ふ、子、必ず世に名あらむ、老夫、亦た須らく他を放つて一頭地を出さしむべし」とある。〔五〕骨愈蚪　骨が節くれ立つて虬龍の如くである。〔六〕懷祖　王述の字、晉書に「王述、藝之と名を齊しうす。しかも、藝之、其だ之を輕んず。これに由つて、情好協はず。藝之、かつて賓友に謂つて曰く、懷祖は、正に當に尚書たるべきのみ。投老、僕射を得べし、更に會稽を求む、便ち自ら遨然」とある。〔七〕萬壑爭交流　會稽の山水を賞して「千巖秀を競ひ、萬壑流を爭ふ」の語があつて、前に武昌西山、及び郭熙秋山平遠の詩中に注して置いた。東坡の自註に「美叔、方に越州を乞ふ」とある。

酒醒夢斷四十秋。　酒醒め、夢は斷ゆ四十秋、
病鶴不病骨愈蚪。　病鶴病まず、骨、愈よ蚪、
惟有我顏老可羞。　惟だ我が顏の老いて羞づべきあり。
醉翁賓客散九州。　醉翁の賓客、九州に散じ、
幾人白髮還相收。　幾人か白髮還た相收む。
我如懷祖拙自謀。　われは懷祖の如く、拙、自ら謀る、
正作尚書已過優。　正に尚書と作つて、すでに過優。
君求會稽實良籌。　君、會稽を求むる、實に良籌、
往看萬壑爭交流。　往いて看よ、萬壑爭うて交も流るるを。

【題義】年兄は、同年に登第せし人。この詩は、發運右司にして年兄たる晁美叔の上京するのを送つたのである。美叔は、卽ち端友の名。

【詩意】われ年二十の頃、絕えて朋友なく、四海の廣き、唯だ弟の子由あるばかり。その時、君は、門を扣いて來訪せられ、何か求むるところあるが如く、その容貌は、鶴の如く、丈高くして、極めて

清げであつた。君が云ふには、歐陽公は、吾を遣して、貴下に從游せよといはれた、公は韓退之の如く、孔孟の道を踏まれる人であるが、貴下の文章を賞し、これをして、一頭地を拔き出るやうに致さうと云はれた。その後、酒醒め、夢斷ゆること、すでに四十年、予は、病鶴の如く、特に病なきも、骨は益す節くれ立ち、老いさらぼひて、顏まで憎さ氣に成つた。歐陽公の賓客は、九州に散在して居るが、白髮頭の幾人をか此に相收むることを得べき。予は王述の如く、自ら生を謀ることは極めて拙、尙書に任せらるれば、全く豫想外の優待であるとのことであつた。そこで、われ東坡は、つくづく物を案ずるに、君にして會稽に赴任したい由、願ひ出でられたのは、まことに善い思付で、萬壑流を爭ふといふ好風景を往いて看ることが出來るから、極めて面白いと思はれる。

【餘論】紀昀の評に「語、特に峭拔、惟だ收處、微にその促を覺ゆ」とある。この詩は、每句押韻した謂はゆる柏梁體で、醉翁遣レ我より以下、已過優に至るまでは、美叔の言葉を其儘寫したので、三句、三句、四句と成つて居るのは、稍や他と異なるところである。

王文玉挽詞

才名誰似廣文寒。
月斧雲斤琢肺肝。
元晏一生多臥病。
子雲三世不遷官。
幽蘭空覺香風在。
宿草何曾淚葉乾。
猶喜諸郎有曹植。
文章還復富波瀾。

王文玉の挽詞

才名、誰か廣文の寒きに似たる、
月斧雲斤、肺肝を琢く。
元晏一生、多く病に臥す、
子雲三世、官を遷さず。
幽蘭、空しく覺ゆ香風の在るを、
宿草、何ぞ曾て淚葉乾かむ。
猶は喜ぶ、諸郎に曹植あるを、
文章還た復た波瀾に富む。

【題義】王文玉は王幼父の父、爵里未詳。王文誥の案に「公北歸、幼安に與ふる書に云ふ、比來、親族或は往來を斷つ、惟だ幼安昆仲、待遇厚きを加ふ、と。又云ふ、もし未だ卽ち溝壑に塡せざれば、伯仲を見るに及び、功成つて歸らむか、と。この詩、猶喜諸郎の句、合に特に不詳なるべきのみ」とある。

【詩意】君は、古しへの鄭虔の如く、平生寒素に甘んじて居たが、誰も才名相似たるものもなく、雲月を斫る斧斤を以て、絕えず、肺肝を磨琢して居た。君は、皇甫謐の如く、一生の大半は病に臥し、又揚雄と同じく、三朝に歷事して、一官潦倒、少しも榮遷の慶が無かつた。幽蘭、すでに摧けて、空しく香風の猶ほ在るを覺え、宿草十年、淚に濕ふ葉は、決して乾くことがない。君、すでに一家を成さむとすも、令息中には、曹植の樣な絕代の才人があつて、その文章、波瀾に富み、すでに一家を成さむとす

【字解】【一】廣文　唐の鄭虔、廣文館學士となる、前に病中大雪、及び鄭戸曹の詩中に注して置いた。

【二】琢肺肝　韓愈の詩に不レ用彫琢惑ニ肝腎一とある。【三】元晏　晉書に「皇甫謐、自ら玄晏先生と號す、終生疾を稱して位を辭す」とある。

【四】子雲　揚雄の名、成哀平の三世、官を遷さず、前に至ニ秀州一の詩中に注して置いた。【五】曹植　諸註に「曹志、蓋し魏の陳思王曹植の孫子、亦た學を好んで才行あるものなり」とある處から、曹植を曹志と改めた本もある。しかし、曹植を絕代の才人といふ意味にすれば、この儘でも解釋の出來ぬこともない。

る上は、君、亦た以て瞑すべしである。

山光寺送客回、次芝上人韻

山光寺、客の回るを送り、芝上人の韻に次す

閑裏清游借隙光。　閑裏の清游、隙光を借る、
醉時眞境發天藏。　醉時の眞境、天藏を發す。
夢回拾得吹來句。　夢回つて、拾ひ得たり吹き來るの句、
十里南風草木香。　十里の南風、草木香ばし。

【題義】程沙隨の古易占に「隋の煬帝、江都に來り、易を筮して、離の賁に之くに遇ひ、乃ち離宮を以て寺となし、名づけて山火といふ、卦の象に取るなり。後、改めて山光といふ。揚州の北十五里に在り、地は灣頭と名づく」とあり、盛儀の維揚志に「山光寺、隋の大業中に建つ」とある。芝上人、名は曇秀。東坡の雜記に「予、廣陵に在り、晁无咎、曇秀道人と舟を同じうして、客を山光寺に送る。客、去つて、予、舟中に醉臥す。秀、詩を作つて云ふ、

扁舟乘興到山光。古寺臨流勝氣藏。慚愧南風知我意。吹將草木作天香。

予、これに和す」とある。

【字解】〔一〕隙光　隙を過ぐる日の光、短い時間。〔二〕天藏　靈良の陰符經註に「六癸を天藏となす、以て伏藏すべきなり」とある。〔三〕夢回　夢が醒める。

【詩意】忙しい間に、一寸ばかりの暇を偸んで清游を試み、この眞境に來りし上は、醉時に、その神祕を歌ひ出さうとした。時しも、南風十里、草木香ばしく、予は午睡の夢醒めし後、その風の吹き寄せ來りし句を拾ひ得ただけである。

送芝上人游廬山

芝上人の廬山に游ぶを送る

二年閱三州。我老不自惜。
團團如磨牛。步步踏陳跡。
豈知世外人。長與魚鳥逸。
老芝如雲月。炯炯時一出。
比年三見之。常若有所適。
逝將走廬阜。計濶道逾密。
吾生如寄耳。出處誰能必。
江南千萬峯。何處訪子室。

二年、三州を閱す、われ老いて自ら惜まず。
團團として、磨牛の如く、步步、陳跡を踏む。
豈に知らむや、世外の人、長く魚鳥と逸するを。
老芝は雲月の如く、炯炯として、時に一たび出づ。
比年、三たび、之を見る、常に適するところあるが若し。
逝いて、將に廬阜に走らむとす、計濶くして道逾よ密。
吾が生、寄の如きのみ、出處、誰か能く必せむ。
江南千萬峯、何の處にか子の室を訪はむ。

【字解】〔一〕二年閱三州　王註に「先生、元祐六年を以て杭を離れ、召されて翰林承旨となる。この年、又出でて潁州に守たり。七年、揚州に徙る。この詩は、乃ち七年の作なり、故に云ふ」とある。〔二〕磨牛　牛に挽かせる石臼。〔三〕如雲月　雲間の月。その

志操の光明透徹なるを云ふ。【四】三見之　はじめ齊安に在つて往來答問し、後、惠州、金陵に於て相遇ひしを云ふ。【五】廬阜　即ち廬山。

【題義】この詩は、前首に見えた芝上人、即ち僧曇秀の廬山に游ぶを送つたのである。

【詩意】二年の間に三州を歷めぐつたが、予が衰老に向ふことは自ら惜しいとも思はず、ぐるぐる廻ることは、石臼を挽く牛の如く、歩歩、ふるい足跡を踏んでばかり居て、世外の人が、いつでも、魚鳥と共に逸情を縱にすることを知らぬ果敢なさ。ここに、老いたる芝上人は、雲間の月の如く、炯炯として、時時一寸顔を出す位、予は近年打つづけて三度も逢つたが、常に意に適するところあるが如く、全く樂天的である。今度は、廬山に出かけるさうだが、計畫の濶大なる程、從つて、道に對して愈よ密接することと思ふ。わが生命は、まことに寄寓して居る樣なもので、出處進退は、誰が之を豫知しやう。他日、江南千萬峰の間に分け入つて、何處に上人の居所を尋ねやうか。

【餘論】紀昀は「計濶の句、未だ醒せず」といつて居るが、如何にも尤もである。

送程德林赴眞州

君爲縣令元豐中。
吏貪功利以病農。
君欲言之路無從。
移書諫臣以自通。
元豐天子爲改容。
我時匹馬江西東。
問之逆旅言頗同。
老人愛君如劉寵。
小兒敬君如魯恭。
爾來明目達四聰。
收拾駔駿冀北空。
君爲赤令有古風。
政聲直入明光宮。
天廐如海養羣龍。
并收其子豈不公。
白沙何必煩此翁。

指定したる四京近縣の長官、王註に「東京は惟だ開封・緱氏、西京は惟だ河南・永安、南京は惟だ宋城、北京は惟だ元城、これを赤縣

程德林の眞州に赴くを送る

君、縣令となる元豐の中、
吏は功利を貪つて、以て農を病ましむ。
君、之を言はむと欲するも、路從るなく、
書を諫臣に移して、以て自ら通ず、
元豐の天子、爲に容を改む。
われ時に匹馬、江の西東、
これを逆旅に問へば、言、頗る同じ。
老人、君を愛すること、劉寵の如く、
小兒、君を敬すること、魯恭の如し。
爾來、明目、四聰を達し、
駔駿を收拾して、冀北空し。
君は赤令となつて、古風あり、
政聲、直に入る明光宮。
天廐、海の如く、羣龍を養ふ、
并せて、その子を收む、豈に公ならざらむや。
白沙、何ぞ必ずしも此翁を煩はさむ。

【字解】【一】諫臣　東坡の自註に「諫臣は麥受之なり」とある。【二】劉寵　前に贈徐州の詩中に注して置いた。【三】魯恭　後漢書の本傳に「中平中に拜せらる。都國、蝗、稼を傷けしが、中平に入らず。河南尹袁安、仁恕掾肥親を遣し、往いて之を廉さしむ。恭、ともに桑下に坐す。雉あり、過ぎて其傍に止まる。傍に童兒あり。親曰く、兒、何ぞ之を捕へざると。兒言ふ、雉、方に雛を將ゆと。親瞿然として起つて曰く、蟲、獸を犯さず、これ一異なり。化、鳥獸に及ぶ、これ二異なり。豎子、仁心ある、これ三異なり、と。府に還り、具さに狀を以て安に白す」とある。【四】明目達四聰　書經に明目四目、達四聰とあつて、明目は、無論、四目を明かにするの義、四は四方を兼れて云ふ。【五】駔駿　いづれも名馬。【六】冀北　冀州の北なる平野、名馬の産地として知られて居る。【七】赤令　特に

といひ、その餘は、乃ち之を曼縣と云ふなり」とある。【八】 白沙　唐では眞州を永正縣白沙鎮と稱して居た。
さらろ」とある。【八】 牧其子　東坡の自註に「君の子郎、制策に擧げられ、文學行義、時に稱

【題義】 この詩は、程德林の眞州に赴任するを送つたのである。査註に「程德林、名は筠、先生と同年、本集二十三卷中に見ゆ。九域志、淮南東路眞州軍事、乾德二年、揚州の永眞縣迎鑾鎭を以て建安軍となし、祥符六年、升せて州となし、揚子縣に治す」とある。

【詩意】 元豐年中、君は、縣令となつたが、その頃は、新法を厲行するといふので、吏は功利を貪つて、農夫を苦しめた。そこで、君は此事に就いて上言したいと思つたが、何分、由るべき路が無いので、書面を諫官に差し出して、自ら通せむとし、それが、幸にも乙夜の覽に入り、神宗皇帝は、爲に容を改めて感動された。その時、予は、匹馬に跨つて、大江の東西を旅したが、隨處の宿屋で聞いて見ると、その言ふことは、大抵同じで、上述の事は、動かぬ處であつた。君は、非常に人望がある爲に、老人は君を愛して、劉寵の樣な循吏だといひ、小兒は君を敬して、魯恭の如き人だといつて居た。その後、天子は、愈よ四目を明かにし、四聰を達せられ、駿馬を拾ひ上げて、冀北の野も無一物に成る位。君は、四京近縣の長官となつて、古人の風ありと稱せられ、その政績の好評は、直接に明光宮に入つて、天子の御耳に達した。元來、天子の御廐は、廣きこと海の如く、羣馬を收容する位であるから、君の令息が登庸された處で、決して、依怙ひいきではない。そして、古しへの白沙鎭、卽ち今の眞州の如き遠地の州縣は、何も必ずしも、君を煩はさずとも善いので、もツと、氣の利いた官職に轉任されることが、まことに望ましい。

古別離、送蘇伯固

三度別君來。此別眞遲暮。三度、君に別れて來る、この別、眞に遲暮。
白盡老髭須。明日淮南去。老髭須を白盡し、明日、淮南に去る。
酒罷月隨人。淚溼花如霧。酒、罷んで、月、人に隨ひ、淚、溼うて、花、霧の如し。
後夜逐君還。夢繞湖邊路。後夜、君を逐うて還り、夢は繞る湖邊の路。

【題義】 古別離は、別離に關係ある古詞で、卽ちそれに擬して蘇伯固を送つたのである。伯固は、前にも見えて居る。

【詩意】 三たび、君に別れたが、今回の別は、わが老年の日に際し、殊に感慨が深い。君も年を取つて、すツかり髭鬚を白くし、明日は淮南に向つて出立されるとのこと。今しも、酒罷んで、月は人に隨ふが如く、淚に溼ひたる花は、霧の如く見える。後日、夜の夢は君を逐うて行き、そして、湖邊の路を繞り歩くことであらう。

【餘論】 紀昀は「音節、生査に似たり、恐らくは誤收に係る」といひ、合註には「この詩、先生の詞類に見ゆ、調名生査子」とある。おもふに、實は塡詞であるが、その詩に近い處より、後人の詞を知

らぬものが此に編入したので、即ち誤收であらう。

谷林堂

深谷下窈窕。高林合扶疏。
美哉新堂成。及此秋風初。
我來適過雨。物至如娛予。
穉竹眞可人。霜節已專車。
老槐苦無賴。風花欲塡渠。
山鴉爭呼號。谿蟬獨清虛。
寄懷勞生外。得句幽夢餘。
古今正自同。歲月何必書。

谷林堂

深谷、下に窈窕、高林、合して扶疏。
美なるかな、新堂成り、この秋風の初に及ぶ。
われ來つて適ま過雨、物至つて予を娛ましむるが如し。
穉竹、眞に人に可なり、霜節、すでに車を專にす。
老槐、苦だ無賴、風花、渠を塡めむと欲す。
山鴉、爭つて呼號、谿蟬、ひとり清虛。
懷を寄す勞生の外、句を得たり幽夢の餘。
古今、正に自ら同じ、歲月、何ぞ必ずしも書せむ。

【字解】〔一〕專車　その極めて大なるを云ふ、家語に「孔子曰く、むかし、禹、羣臣を會稽の山に致す、防風氏、後れて至る、禹、殺して之を戮す、その骨節、車を專にす」とある。〔二〕無賴　勝手にはびこる。〔三〕勞生　李白の詩に、處世若二大夢一、胡爲勞二其生一とある。

【題義】名勝志に「大明寺は、蜀岡の側に在り、寺內谷林堂」とある。合註の說に、谷林とは、この詩の起首二句から取つたので、後から定めたものかも知れないとあるが、或は其反對かも知れぬ。

【詩意】深谷は、下つて行くと奧深く、高林は、合しても矢張り扶疏である。新堂は、美事に落成し、丁度、秋風の吹く初であつた。われ此に來ると、折から過雨に遇ひ、あらゆる物は、特に予を娛ましめる樣に見えた。中にも、若竹は、勢がよくて賴母しく、霜を凌ぐべき高節を矜りつつ、すでに車を專にする位大きくなつた。老槐は、勝手にのさばり、風に吹かるる落花は、溝を埋めむとして居る。山鴉は、爭つて叫ぶが、谷の蟬は、淸淸しく無心らしく聞こえる。わが思を浮世の外に寄せ、幽夢醒むる時に、偶然句を得た。大觀すれば、古今、正に相同じであるから、月並流に、落成の年月などを事事しく書き留めるにも及ばぬことと思はれる。

【餘論】紀昀は「深意なくして謹嚴厚重、自ら老筆」といつて居る。

雲師無著、自金陵來見予廣陵、且遺予支遁鷹馬圖、將歸以詩送之、且還其畫

雲師無著、金陵より來つて予を廣陵に見る。且つ予に支遁の鷹馬圖を遺る。將に歸らむとす、詩を以て之を送り、且つ其畫を還す

道人自嫌三世將。　道人自ら嫌ふ三世の將、

【字解】〔一〕三世將　史記王翦傳に「將たる三世の者は、必ず敗る、

棄家十年今始壯。　家を棄てて十年、今、はじめて壯。
玉骨猶寒富貴餘。　玉骨、猶ほ寒し富貴の餘、
漆瞳已照人天上。　漆瞳、すでに照らす人天の上。
去年相見古長干。　去年、相見る古長干、
衆中矯矯如翔鸞。　衆中、矯矯として翔鸞の如し。
今年過我江西寺。　今年、わが江西の寺を過ぐ、
病瘦已作霜松寒。　病瘦、すでに霜松の寒を作す。
朱顏不辨供歲月。　朱顏、辨ぜず歲月に供するを、
風中蒿火湯中雪。　風中の蒿火、湯中の雪。
好問君家黃面翁。　好し問へ、君が家の黃面翁、
乞得摩尼照生滅。　摩尼を乞ひ得て、生滅を照らさむ。
莫學王郎與支遁。　學ぶ莫れ王郎と支遁とを、
臂鷹走馬憐神駿。　鷹を臂にし、馬を走らして神駿を憐む。
還君畫圖君自收。　君の畫圖を還す、君、自ら收めよ、

その殺伐するところ多きを以てなり。その後、その不肆を受けむ。今王雖、すでに三世の將なりと。居る何もなくして、項羽、趙を救うて秦軍を擊ち、果して王離が虜にす」とある。〔三〕人天上　人間天上を合稱す。〔四〕古長干　一統志に「金陵の長干里は聚寶門外に在り、長干橋あり」と見ゆ。〔五〕矯矯　傑出の貌。〔六〕蒿火　よもぎの火、藁火の如く直に消ゆるもの。〔七〕黃面翁　釋迦を云ふ。〔八〕摩尼　明珠、寶信經に「明月珠・摩尼珠は、多く龍の胸中に在り」と見ゆ。〔九〕王郎　卽ち王情。〔一〇〕支遁　世說に「支道林、常に數匹の馬を養ふ、或は言ふ、道人、馬を畜ふは韻ならずと。支曰く、貧道、その神駿を愛す」とある。〔一〇〕木人騎土牛　州奉が鐘離と相戲れし語、前に梅聖俞

の詩中に注して置いた。

不如木人騎土牛。　如かず木人の土牛に騎するに。

【題義】雲師無著は、坊さんであるが、如何なる人か分からぬ。この詩題は、雲師無著が金陵から揚州に來て東坡を訪ひ、そして、支遁鷹馬の圖を惠投された。やがて、その金陵に歸らむとするに際し、この詩を作つて其行を送り、且つ其畫を還したといふのである。

【詩意】雲師は、自ら三世將門の子である處から、武人と成れば、きッと失敗するといふので、家を棄つること、すでに十歲、そして、やッと壯年になつた。さすがに富貴の家の出であるから、玉骨なほ寒く、漆を點じた樣な瞳は、人間天上を殘りなく照らす位。去年、金陵の長干で遇つたが、衆中に傑出して、さながら、天がける鳳鸞の樣であつた。然るに、今年、われを揚州の寺に訪はれると、形貌一變、病瘦の後、霜を帶びたる松の如く見えた。朱顏を長く駐めるには、何を歲月に供したら善いか。とても、寄る年波には敵し得ぬもので、人生の果敢なさは、風中の蒿火、湯中の雪の如くである。されば、佛家の大本尊たる釋迦に問ひ、摩尼の明珠を胸中に收め、その智慧を以て、生滅の理を照破する外はない。予は古しへの王愔・支遁を學んで、鷹を臂にし、馬を走らし、その名馬の神駿を愛する樣な氣には成れぬ處から、折角ながら、頂戴した畫を返上するので、君は之を收納されることと然るべく、又これを見たならば、豁然大悟、到底、木人が土牛に騎して居るのに及ばぬと思はれることであらう。

予少年頗知種松、手植數萬株、皆中梁柱矣、都梁山中、見杜輿秀才、求學其法、戲贈二首

予少年、頗く松を種うるを知る。手植數萬株、皆梁柱に中れり。都梁山中、杜輿秀才を見る、其法を學ばむことを求む。戲に贈る　二首

霧宿泥行草棘中。　露宿泥行、草棘の中、
十年春雨養髯龍。　十年春雨、髯龍を養ふ。
如今尺五城南杜。　今の如き、尺五城南の杜、
欲問東坡學種松。　東坡に問うて種松を學ばむと欲す。

【題義】東坡は、少年の頃より、松を養植することを餘程よく知つて居たので、現に手植の數萬株は、皆生長して、梁柱に用ひられた。この頃、都梁山中に於て、秀才杜輿に逢つた處が、その法を傳授して呉れろといつたから、戲に二絶句を賦して之に贈つた。査註に「杜輿、字は子師、盱眙の人。晁无咎の雞肋集、杜子師字序あり。本集に、種松の法を記す。十月以後、冬至以前、松實結熟して未だ落ちず、折り取り、蓼を併せて、それを竹器に收む。春初に至り、實を取つて荒茅地中に入る、春雨を得て自ら松を生ず、性至つて堅悍なるも、はじめ生ずるときは至つて脆弱、多く日と牛羊とを畏る、故に荒茅の地を須ひ、茅陰を以て日を障る、須らく護するに棘を以てすべし。五年の後、乃ち其下枝を洗ふべく、七年の後、乃ち其細密なる者を去るべし」とある。

【詩意】草やいばらの生ふる中を、露に宿し、泥に行いて、懇に世話をなし、十年の久しき、そぼふる春雨に霑されて、松は段段生長する。君は、城南咫尺に住んで居る都人であるが、予に問うて、松を植ゑることを研究しやうといふのは、ささしく志あるものである。

【字解】〔一〕髯龍　松を云ふ。
〔二〕尺五城南杜　杜甫の詩に、同歸尺五天とあつて、皇城を去ること僅かばかりといふ義、城南杜の杜は秀才の姓。

君方掃雪收松子。　君、方に雪を掃うて松子を收め、
我已開榛得茯苓。　われ、已に榛を開いて茯苓を得たり。
爲問何如插楊柳。　爲に問ふ、楊柳を插むに何如ぞや、
明年飛絮作浮萍。　明年、飛絮、浮萍となる。

【詩意】君は、今しも、雪を掃つて松の實を拾ひ集められるが、予の植ゑた松は、すでに長じ、荆榛を披いて、その根から茯苓を掘り出した位。楊柳を插木にすると、すぐに根が付くが、明年、柳の花が咲き、それが飛ぶと浮萍となるだけで、何の效果もない。これに比較すると、松を植ゑるのは、はるかに、厚生利用の道に叶つたものである。

【字解】〔一〕浮萍　施註に「晉說、楊花、水に入つて浮萍となる、これを驗するに信に然り」とある。

行宿泗間見徐州張天騏次舊韻

行いて泗間に宿し、徐州の張天騏を見、舊韻に次す

二年三蹶過淮舟。　二年、三たび躓む、淮を過ぐるの舟、
款段還逢馬少游。　款段、還た逢ふ馬少游。
無事不妨長好飲。　無事、妨げず長く飲を好むを、
著書自要見窮愁。　著書、自ら窮愁を見るを要す。
孤松早偃原非病。　孤松早く偃す、原と病に非ず、
倦鳥雖還豈是休。　倦鳥還ると雖も、豈に是れ休せむや。
更欲河邊幾來往。　更に河邊に幾たびか來往せむと欲す、
祇今霜雪已蒙頭。　祇今、霜雪、すでに頭に蒙る。

【題義】この詩は、行いて泗水の間に宿し、徐州の張天騏に逢つたから、舊韻に次して、これに示したのである。舊韻は、卽ち前に見えた送張山人歸彭城と題する詩の韻である。

【詩意】予は、この二年の間に、三度、淮水の渡舟に乘り、ここに、馬を驅つて、馬少游に比すべき君に邂逅した。苟くも、無事なる上は、長しへに、酒すきを發揮した處で差支はないし、書を著すのは、自然窮愁を顯はす爲めで、君の刻下の境涯は、まさしく此の如くであらう。しかし、孤松が早く横に廣がつたとて、もとより病の爲ではないし、倦鳥は、飛び還つても、それッきりで休むといふのではなく、君とても、今後、更に活動することもあらう。そこで、今後幾たびも、河邊を往來して、君に逢はうと思つて居るが、只今、霜雪が頭上に蒙り、大分年が寄つて、おもふ樣に成らぬのは、まことに致方の無いことである。

【餘論】紀昀は「東坡の七律、駿快なるもの多し、かくの如きの沈著を得難し」といつて居る。

次韻劉景文贈傅義秀才

劉景文の傅義秀才に贈るに次韻す

幼眇文章宜和寡。　幼眇の文章、宜なり、和寡し、
崢嶸肝肺亦交難。　崢嶸の肝肺、亦た交はる難し。
未能飛瓦彈清角。　未だ瓦を飛ばして、清角を彈ずる能はず、
肯便投泥戲潑寒。　肯て便ち泥を投じて潑寒に戲れむや。
忽見秋風吹洛水。　忽ち見る、秋風の洛水を吹くを、
遙知霜葉滿長安。　遙に知る、霜葉の長安に滿つるを。

【字解】〔一〕幼眇　要眇と讀む、奥深く玄妙なる貌。〔二〕崢嶸　高くすぐれたる貌。〔三〕飛瓦彈清角　韓非子に「衞の靈公、晉に之く。平公、これを臺に施す。公、乃ち師涓を召して師曠の傍に坐せしむ。琴を援つて之を撫して、未だ終らず。師曠曰く、清徵に如かずと。平公、試に之を聽かむことを請ふ。一たび奏す

【字解】〔一〕款段　馬をいふ。〔二〕馬少游　前に山村五絶の詩中に注して置いた。〔三〕窮愁　史記虞卿傳に「意を得ず、乃ち書を著し、上は春秋を採り、下は近世を觀、曰く、節義・刺譏・揄摩・政謀、凡そ八篇、世、これを傳へて虞氏春秋といふ」とある。〔四〕早偃　酉陽雜俎に「世傳ふ、松千歲、方に頽平偃蓋と。然れども、數年輒ち偃するあり、但し、根下に於て、石に遇へば偃するのみ」とある。松は上へ上へと

詩成送與劉夫子。　詩成らば、送與せよ劉夫子、
莫遣孫郎帳下看。　孫郎をして、帳下に看せしむる莫れ。

り、歴、天に聞こゆ。師曠曰く、清角に如かずと。一たび之を奏すれば、雲あり、西北方より來り、再び之を奏すれば、大風至り、大雨これに隨ひ、帷幄を裂き、俎豆を破り、廊瓦を墮す」とある。【題】　投泥戲潑寒　唐書張說傳に「玄宗、召して中書令となす。はじめ、武后の末年、潑寒胡戲を爲す。中宗、かつて樓に乘じて觀覽す。ここに至り、四夷の來朝に因つて、復た之を爲す。說、上疏して曰く、四夷和を請ふ、當に接するに禮樂を以てし、示すに威德を以てすべし。乞寒潑胡、未だ典故を聞かず、褻體誣足、泥を沮し、水を揮ふ、盛德何ぞ見むと、これを納る」とある。【題】　孫郎帳下看　前に次韻答邦直子由の詩中に註して置いた。

【題義】　この詩は、劉景文の傳義秀才に贈る詩に次韻し、仍つて秀才に贈つたのである。

【詩意】　奥深く玄妙なる文章は、和する人が少く、峥嶸たる高論を肺肝より吐き出すものに對しては、なかなか交際が六つかしい。劉景文の贈詩は、要するに、あまり、ひねり過ぎて居る。しかし、奇を求めた處で、かの師涓の如く、清角を彈じて廊瓦を落すことは出來ぬことであるし、潑寒の胡戲を爲して、泥を投げつけるのは、無論宜しくない。秋風の洛水を吹くを見て、霜を帶びた落葉の長安に滿つるを知り、それを巧對となすは、卽ち君の長所である。そこで、君の詩が出來たならば、荆州に比すべき劉君の處に送つて遣るが善いので、かの孫策帳下の兒をして、讀ましめてはならぬ。

【餘論】　紀昀は「中四句、虛字平頭、東坡、往往忌まず、然れども、是れ一病、能く詩をして薄くして剽ならしむ」といつて居るが、まさしく篤論である。

在彭城日、與定國爲九日黃樓之會、今復以是日、相遇於宋、凡十五年、憂樂出處、有不可勝言者、而定國學道有得、百念灰冷、而顏益壯、顧予衰病、心形俱悴、感之作詩

彭城に在るの日、定國と九日黃樓の會を爲し、今復た是日を以て、宋に相遇ふ、凡そ十五年、憂樂出處、言ふに勝ふ可からざる者あり。而して、定國、道を學びて得るあり、百念灰冷、しかも顏益壯。顧るに、予衰病、心形俱に悴む。これに感じて詩を作る

菊盞黃囊自古傳。　菊盞黃囊、古しへより傳ふ、
長房寧復是臞仙。　長房、むしろ復た是れ臞仙。
應從漢武橫汾日。　應に、漢武、汾に橫ふの日に從ふべし、
數到劉公戲馬年。　數へて到る、劉公、戲馬の年。
對玉山人今老矣。　玉山の人に對して今老いたり、
見恒河性故依然。　恒河の性を見て故と依然。
王郎九日詩千首。　王郎九日、詩千首、

【字解】　〔一〕　菊盞黃囊　續齊諧記に「汝南の桓景、費長房に隨つて游學累年。長房、謂つて曰く、九月九日、汝の家、當に災あるべし、宜しく急に去るべし。家人をして、各〻絳囊を作つて茱萸を盛り、以て臂に繫ぎ、山に登つて菊酒を飲ましむれば、この禍、消ゆべし、と。景、その言の如くし、家を擧げて山に登る。夕に還つて見れば、雞犬一時暴死す。長房、これを聞いて曰く、これ代る

今賦黃樓第二篇

今賦す、黃樓の第二篇。

「漢の武帝の宮人賈佩蘭、九月九日、茱萸を佩び、蓬餌を食ひ、菊花の酒を飲む、云ふ、人をして長壽ならしむ」とある。【三】漢武横汾　文選に「漢の武帝、河東に行幸し、后土を祠り、秋風辭を作つて曰く、泛ㇾ楼船一兮渉ㇾ汾河一、横ㇾ中流一兮揚ㇾ素波一」とある。【四】劉公戲馬　南齊書に「宋武、姓は劉氏、諱は裕、宋公となつて、彭城に在り、九月九日、項羽の戲馬臺に登る」とある。【四】對玉山人　晉書裴楷傳に「風神高邁、容儀俊爽、時人稱す、嬰叔則を見れば、玉山に近づくが如く、人に照映するなり」とある。【五】恒河性　初學記に「佛、波斯匿王に問ふ、むかし、恒河の水を見る、今見るところと何ぞ異なる。王對ふるに、寂然異なきを以てす。佛、再び之に語る、汝の髮白く面皺あるを以てして、ここに精性を見れば、未だ曾て變あらざるなり」とある。

【題義】　さきに、彭城に居た時、王定國と共に黃樓に登つて、重陽の雅會を催したが、今又その日を以て、宋中に於て相遇ひ、戲ふれば、すでに十五年になり、その間に於ける悲喜進退は、殆んど言ふに勝へざるものがある。しかし、定國は、道を學んで得るところあるものと見え、百念灰の如く冷かにして、顏色は、益す若若しい。それに較べると、予、東坡は、衰病の餘、心形ともに憔悴した。そこで、これに感じて、この詩を作つたといふのである。

【詩意】　菊花の盃、茱萸の囊は、古しへより傳ふるもので、これを桓景に敎へた費長房は、よもや、痩せた仙人ではあるまい。九月九日といへば、漢の武帝に從つて、樓船、汾河を横ぎつた日であるが、さし向、曾游の緣故があるので、劉裕が彭城に於て戲馬臺に登つたことを思ひ出す。玉山の如き人に對しては、今吾老いたりと云つて歎する外はなく、恒河の本性は、依然として、昔の通りである。王君は、その九日に於て、千首の詩を賦せられたが、今日は、黃樓の第二篇を賦し出されることであらう。

【餘論】　紀昀は「對玉山人、句法佳ならず」といつて居るが、頗る的確である。

九日次定國韻

九日、定國の韻に次す

朝菌無晦朔。蟪蛄疑春秋。
朝菌は晦朔なく、蟪蛄は春秋を疑ふ。

南柯已一世。我眠未轉頭。
南柯、すでに一世、わが眠、未だ轉頭せず。

仙人視吾曹。何異蜂蟻稠。
仙人、吾曹を視る、何ぞ蜂蟻の稠きに異ならむ。

不知蠻觸氏。自有兩國憂。
知らず蠻觸氏、自ら兩國の憂あるを。

我觀去來今。未始一念留。
われ去來今を觀るに、未だ始めより一念留まらず。

奔馳竟何得。而起無窮羞。
奔馳、竟に何をか得たる、しかも、無窮の羞を起す。

王郎誤涉世。屢獻久不醻。
王郎、誤つて世を涉り、屢ば獻じて久しく醻いられず。

黃金散行樂。清詩出窮愁。
黃金、行樂に散じ、清詩、窮愁を出す。

俯仰四十年。始知此生浮。
俯仰、四十年、はじめて知る、この生の浮なるを。

軒裳陳道路。往往兒童收。
封侯起大第。或是君家騶。
似聞負販人。中有第一流。
炯然徑寸珠。藏此百結裘。
意行無車馬。倏忽略九州。
邂逅獨見之。天與非人謀。
笑我方醉夢。衣冠戲沐猴。
力盡病騏驥。伎窮老伶優。
北山有雲根。寸田自可耰。
會當無何鄉。同作逍遙游。
歸來城郭是。空有纍纍邱。

【字解】〔一〕朝菌　莊子に「朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず、これ小年なり」とある。〔二〕南柯　異聞集に「淳于棼、かつて夢に一國に至る、大槐宮といふ。國に入る、王、女を以て之に妻はせ、拜して南柯太守と爲す。夢中倏忽として、一世を度るが若し。覺めて之を理するに及びて、乃ち宅南大槐樹下の蟻穴なり」とある。〔三〕蠻觸氏　莊子に見ゆ、前に袁公濟和復次韻の詩中に注して置いた。〔四〕王郎　王定國を云ふ。〔五〕君家騶　騶は馬飼ひ、唐人の詩に咸陽原上英雄卒、半是君家奚ノ馬來と云ふと同じ。〔六〕負販　貨物を背負うて賣りに行く、即ち行商。〔七〕百結裘　ぼろぼろに破れた著物。〔八〕沐猴　漢書伍被傳に「漢廷の公卿列侯、皆沐猴にして冠するが如きのみ」とある。〔九〕雲根　石を云ふ。〔一〇〕可耰　耰は鋤す。〔一一〕無何鄉　詳しくは無何有鄉、莊子に「何ぞ之を無何有の鄉、廣莫の野に樹ゑ、彷徨乎として其側に無爲ならざる」とある。〔一二〕城郭是　搜神記に「遼東華表柱上に鶴あり、言うて曰く、有ノ鳥有ノ鳥丁令威、去ノ家千歲今來歸、城郭猶是人民非、何不ノ學ノ仙冢纍纍」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】朝菌は、唯だ一日で死ぬから、月の晦朔を一緒に知つて居らず、夏蟬は、三伏の間だけ生きて居るから、春秋は如何なるものかと疑ふばかり。夢に南柯の太守となつたのも、一世を度つたもので、眠つた儘、まだ頭を轉じない間の出來事である。生死の外に超然たる仙人から見ると、吾輩人類がうぢやうぢやして居るのは、蜂や蟻の數多いと格別の相違もない。如何なれば、蠻觸二氏は、互に國家の憂を懷いて、蝸牛角上に於て鬪爭したのであるか。これを思ふと、死生輕んずべく、富貴忽にすべく、百念皆灰冷、區區として黨爭をなすのは、實に愚の極である。予は、過去現在未來に亙つて達觀し、はじめより、何處にも一念が留まつて居ない。いくら忙しく立ち廻つた處で、畢竟、何をか得べき、唯だ無窮の羞を起すだけである。ここに、王君は、誤つて世を涉り、度度朝廷に上言したが、お取り上げにならず、そこで、行樂の爲に黃金を散じ、窮愁の餘、清麗なる詩を作つた。俯仰して、四十年間の事を見、はじめて、この人生は浮き浮きして、何も根柢の無いものだといふことを知つた。大官の用ふる車や禮服は、道路に陳列してあつて、ともすれば、兒童輩が之を收めるし、封

309
65

侯になつて大きな屋敷を建てるものがあつても、ひよッとすると、元と君の家の馬飼であつた。これは、詰まらぬ者が偶然立身したのであるが、どうかすると、行商人の中にも、第一流の大人物が居るし、炯然たる直徑一寸の名珠が、襤褸の中に包まれて居ることもある。そこで、君は、都をさまよひ出で、車馬なきに拘はらず、倏忽の間に九州を歴めぐつたが、偶然邂逅して、ここで御目にかかつたのは、もと天が與みしたからで、到底、人の謀ではない。今しも、予は、醉夢の中に在つて、衣冠物物しきも、さながら沐猴に戯るるが如く、力盡きては、名馬も役に立たず、技倆が窮まつては、名優も老い朽ちて仕舞つた。北山には、石が峨峨として居るが、わづかばかりの田は、耕すことが出來る。いづれ、君と重ねて無何有の鄉に遇うて、逍遙の游を爲さうと思ふ。その時、おのが鄉里に歸ると、城郭のみは依然たれども、冢纍纍として、親戚故舊は皆死んで仕舞ひ、まことに、感慨に堪へぬことであらう。

【餘論】　査評に「一語の九日に及ぶなし、只だ是れ自ら襟期を寫して檢點に暇なし」とあり、紀評に「滾滾として來り、却つて屈曲自如、一沓語なし」とある。

終